

堂地中道遺跡

平成4～6年度県営畠地帯総合土地改良事業
伊那西部地区埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年

長野県上伊那地方事務所
上伊那郡箕輪町教育委員会

堂地 中道 遺跡

平成 4 ~ 6 年度県営畠地帯総合土地改良事
業伊那西部地区埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年

長野県上伊那地方事務所
上伊那郡箕輪町教育委員会

序

箕輪町は、東西の山々を源とする中小河川と、それらが流れ込む天竜川によって形成された河岸段丘に代表され、伊那谷の北部に位置しております。これら河川の周辺には、水と魚などの食料を求め、遙か先史の頃より人々が暮らし始め、現在の箕輪町に至っています。中でも町の北西部を流れる深沢川の両岸は、古くは縄文時代からの遺跡が密集する所であり、その代表的な遺跡として堂地、中道の両遺跡が上げられます。

昭和48年度に、中央自動車道西宮線の建設工事に先立ち、両遺跡の緊急発掘調査が長野県教育委員会によって実施されました。調査では、縄文時代・奈良・平安時代の数多くの住居跡を始め、当時の生活を物語る土器や石器などが多数出土しました。特に中道遺跡では、奈良時代の大型住居跡から、貴族など特定の人々が所有したとされる『奈良三彩』の小壺の蓋が出土し、県内4出土例の一つに上げられています。これは、律令時代の施行細則『延喜式』に書かれている、東山道『深沢の駅』の存在を推測させる、貴重な発見であったと言えます。また、町教育委員会では、県道「沢尻箕輪線」の建設工事に先立ち、昭和62年には堂地遺跡を、63年には中道遺跡を調査し、上記同様に多大な成果を収めています。

今回の調査は、上伊那地方事務所が行う県営畠地帯総合土地改良事業に係るもので、町教育委員会では両遺跡とも第2次となります。前回と同様に、非常に内容のある成果を収めることができました。その結果につきましては、本書の中で詳細に記してありますので、多くの皆様が読まれ、広く活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にご理解とご協力をいただきました、上伊那地方事務所並びに地元の松島、大出の各区、そして調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町中箕輪11,194番地1他に所在する堂地遺跡、3,298番地2他に所在す中道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。堂地遺跡は、平成5年3月1日から3月5日まで立合い調査を、6月7日から6月16日まで試掘及び本調査を行った。中道遺跡は、平成5年10月20日から12月24日、平成6年4月13日から11月4日まで試掘及び本調査を実施した。整理作業及び調査報告書の作成作業は、5年12月17日から平成6年3月20日、11月7日から平成7年3月10日まで行った。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。

遺物の接合・復元—福沢幸一

遺構図の整理・トレースー赤松　茂、漆山美晴、根橋とし子、西出あゆみ、宮脇陽子
遺物の実測・トレースー大串久子、根橋とし子、根橋由紀、西出あゆみ、宮脇陽子、
百瀬千里

挿図作成ー赤松　茂、漆山美晴、根橋とし子、西出あゆみ、百瀬千里

写真撮影・図版作成ー赤松　茂

4. 本書の執筆は、赤松　茂、宮脇陽子が行った。

5. 本書の編集は、赤松　茂、漆山美晴、大串久子、根橋とし子、根橋由紀、西出あゆみ、
樋口彦雄、福沢幸一、宮脇陽子、百瀬千里が行った。

6. 遺構実測図は、次の縮尺に統一した。

住居址・掘立建物址・溝状遺構ー1:60、カマド・土坑・ピット・竪穴状遺構ー1:40

7. 遺物実測図・拓影図は、次の縮尺に統一した。

土器ー1:4、石器ー1:3、鉄器ー1:2

8. 土層及び土器の色調は、『新版 標準土色帖』を用いて記してある。

9. 土器の接合状況は、観察できるものののみ断面に表示してある。

10. 挿図中のスクリーントーンによる表示は、次のものを表す。

[●]—焼土・須恵器断面 [■]—石断面 ●—土器 [.]—内面黒色処理

11. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

12. 本調査及び本書の作成にあたり、各機関並びに個人の方々にご指導ご協力をいただいた。
記して感謝申し上げる。

機関ー大出区、松島区、上伊那西天童土地改良区、(財)長野県埋蔵文化財センター

個人ー唐沢庸二、唐沢義次、助川朋広、関　善一、友松　諭、福島　永

本文目次

題字	団長 桶口彦雄
序	教育長 堀口 泉
例言	
本文目次	
押図目次	
図版目次	
第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査組織の編成	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	7
第1節 自然環境	7
第2節 歴史環境	8
第Ⅲ章 堂地遺跡の調査	10
第1節 調査方法と結果概要	10
第2節 土層堆積状況	12
第3節 遺構と遺物	14
第Ⅳ章 中道遺跡の調査	16
第1節 調査方法と結果概要	16
第2節 土層堆積状況	21
第3節 遺構と遺物	22
第Ⅴ章 まとめ	50
報告書抄録	
図版	

挿図目次

第1図 位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	9
第3図 調査区設定図	10
第4図 全体図	11
第5図 土層堆積図	13
第6図 1号住居址実測図	14
第7図 1号住居址出土土器実測図	15
第8図 1号ピット実測図	15
第9図 調査区設定、トレンチ土層堆積図	17・18
第10図 全体図	19・20
第11図 本調査区土層堆積図	21
第12図 1号住居址実測図	22
第13図 1号住居址出土土器実測図	23
第14図 2号住居址実測図	24
第15図 2号住居址カマド、カマド下土坑実測図	25
第16図 2号住居址出土土器実測図	26
第17図 2号住居址出土鉄器実測図	28
第18図 3号住居址実測図	29
第19図 3号住居址出土土器実測図	30
第20図 4号住居址カマド実測図	31
第21図 4号住居址出土土器実測図	31
第22図 5号住居址実測図	32
第23図 5号住居址出土土器実測図	33
第24図 6号住居址実測図	35
第25図 6号住居址出土土器・鉄器実測図	36
第26図 1号掘立柱建物址実測図	37
第27図 2号掘立柱建物址実測図	38
第28図 3号掘立柱建物址実測図	39
第29図 3号掘立柱建物址出土土器実測図	39
第30図 1・2号溝状遺構実測図	40

第31図	2号溝状遺構出土土器実測図	41
第32図	3号溝状遺構実測図	41
第33図	1号竪穴状遺構実測図	42
第34図	土坑実測図	43
第35図	3号土坑出土土器実測図	43
第36図	ピット実測図1	45
第37図	ピット実測図2	46
第38図	遺構外出土土器実測図	48
第39図	遺構外出土石器実測図	48

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	1号住居址出土土器観察表	15
第3表	1号住居址出土土器観察表	23
第4表	2号住居址出土土器観察表	27
第5表	2号住居址出土鉄器観察表	28
第6表	3号住居址出土土器観察表	30
第7表	4号住居址出土土器観察表	31
第8表	5号住居址出土土器観察表	33・34
第9表	6号住居址出土土器観察表	36
第10表	6号住居址出土鉄器観察表	36
第11表	3号掘立柱建物址出土土器観察表	39
第12表	2号溝状遺構出土土器観察表	41
第13表	土坑一覧表	44
第14表	ピット一覧表	46・47
第15表	遺構外出土土器観察表	48
第16表	遺構外出土石器観察表	49

図 版 目 次

- 図版1 堂地遺跡 調査区全景、土層堆積状況、1号住居址(南方より)
- 図版2 中道遺跡 第2.3試掘調査区遠景、第1試掘調査区トレンチ掘削状況、第1トレンチ
- 図版3 第1トレンチ土層堆積状況、第8トレンチ、第8トレンチ土層堆積状況
- 図版4 第2試掘調査区トレンチ掘削状況、第13トレンチ、第13トレンチ土層堆積状況
- 図版5 第3試掘調査区トレンチ掘削状況、第19トレンチ、第19トレンチ土層堆積状況
- 図版6 本調査区全景1、本調査区全景2
- 図版7 1号住居址、2号住居址
- 図版8 3号住居址、4号住居址
- 図版9 5号住居址、6号住居址
- 図版10 1号掘立柱建物址、2号掘立柱建物址
- 図版11 3号掘立柱建物址、1.2号溝状遺構
- 図版12 3号溝状遺構、1号竪穴状遺構
- 図版13 1号土坑、2号土坑、3号土坑
- 図版14 2号ピット、3号ピット、8号ピット
- 図版15 出土土器1
- 図版16 出土土器2
- 図版17 出土土器3・石器
- 図版18 出土鉄器、調査参加者

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 調査の経過

中道・堂地の両遺跡は、町の北西部に流れる深沢川の両岸一帯に広がる縄文・奈良・平安時代の複合遺跡であり、右岸に中道遺跡、左岸に堂地遺跡が所在する。昭和48年度に実施された中央自動車道建設に先だつ発掘調査により、長野県の奈良・平安時代を代表する大集落遺跡の一つとして、この両遺跡が広く知られるようになった。特に論議を呼んでいる、東山道信濃ルートに関連性の高い遺跡として、多くの研究者の注目を集めている。また、町教育委員会では、昭和62・63年度には、一般県道「沢尻-箕輪線」建設工事に伴う調査を実施し、多大な成果をおさめている。



第1図 位置図

平成5年2月、長野県上伊那地方事務所より、町以南より進めてきた県営畠地帯土地総合改良事業伊那西部地区に伴い、工区にかかる埋蔵文化財の所在の確認及びその保護の対応について町教育委員会に協議が申し入れられた。町教育委員会は、県教育委員会文化課に連絡をとり、早急に3者間による保護協議を行い、4年度は堂地遺跡の立ち合い及び試掘調査を、5年度は堂地遺跡の本調査、中道遺跡の試掘及びその結果に基づく発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

5年度に入り、10月に調査の委託契約が交わされ、町教育委員会はそれを受けて、新たに調査團を結成し調査を実施する運びとなった。しかし、工区全域における試掘調査が完了し、その結果による本調査に着手したが、調査途中で今後の事業進行について再度協議を行った結果、6年度に一部現地調査と報告書の刊行を移行することで合意し、再契約を結び実施した。

第2節 調査組織の編成

調査主体・事務局

箕輪町教育委員会 教育長…… 堀口 泉
社会教育課長 上田 明勇（平成5年3月退任）
社会教育課長 大槻 丞司（平成5年4月着任）
副 参 事 柴 登巳夫（箕輪町郷土博物館館長）
副主幹…… 石川 寛（同館学芸員－平成5年3月退任）
副主幹…… 青木 正（同館職員－平成5年4月着任）
主 植 査 赤松 茂（同館学芸員－調査主任）
臨時職員…… 酒井 峰子
臨時職員…… 根橋とし子（調査員）
臨時職員…… 宮脇 陽子（調査員）

調査団

調査団長 楠口 彦雄
調査員… 福沢 幸一
調査団員 井上武雄、井上隆次、遠藤 茂、大串久子、大槻泰人、大槻茂範、
大沼ひとみ、岡 正、春日義人、金沢昭吾、唐沢房恵、倉田千明、
小池久人、小嶋久雄、後藤主計、小松峰人、笛川正秋、戸田隆志、
西出あゆみ、根橋由紀、野村吉、伯耆原 正、堀 五百治、堀 美人、
堀内昭三、Michael.Wittmer、松田貫一、三浦幸子、水田重雄、向山幸次郎、
百瀬千里、百瀬美晴、山口今朝人、山口昭平、山田武志

第3節 調査日誌

【平成4年度】

3月1日（月）晴 堂地遺跡にて立ち合い調査を開始した。

3月2日（火）晴 住居址を確認し、今後の進行について3者間で協議をした。

3月3日（水）晴 土層断面測量、写真撮影等記録を行う。

3月4日（木）晴 機材を撤収し、調査を終了した。

3月5日（金）晴 現地で、3者間にて今後の保護協議を行った。



【平成5年度】

6月7日（月）晴 堂地遺跡の未工事区の調査を開始した。重機で、試掘トレンチの掘削及び表土剥ぎを行った。

6月8日（火）曇 3月2日に確認した住居址の上面確認、トレンチ壁面削りを行った。

6月10日（木）晴後雨 住居址の掘りと、トレンチ壁面削りを進めた。

6月11日（金）晴 トレンチの掘削及び土層断面測量を行う。

6月16日（水）晴 住居址の写真撮影、測量を行う。本日で堂地遺跡分の調査を終了した。

10月20日（水）曇 中道遺跡の調査を開始した。機材の搬入を行った。

10月21日（木）晴 第4試掘調査区の北端から $1 \times 2\text{ m}$ 幅のグリッドを設定し、手掘り作業を行う。

10月22日（金）晴 昨日に引き続いてのグリッド掘りを行う。グリッド内から、遺構・遺物が確認された。みのわ・箕輪毎日・長野日報が取材に来る。

10月25日（月）晴 第4試掘調査区のグリッド掘りの続きと、第1試掘調査区のトレンチ掘りを重機で行う。





10月26日（火）晴 終日トレントの遺構確認面までを手作業で掘る。

10月27日（水）～29日（金）晴
第1試掘調査区のトレント断面削りと、測量作業を行う。

11月1日（月）晴 記録の終わったトレントから、埋め戻し作業を始める。

11月2日（火）晴 第1試掘調

査区での測量を終え、全てのトレントを埋め戻した。第2試掘調査区のトレントを設定した。

11月4日（木）晴 第2試掘調査区に設定したトレントを重機にて掘削。

11月5日（金）～10日（水）晴 第2試掘調査区の各トレント断面削り、測量作業を行う。

11月12日（金）晴 トレントの断面測量を行う。第3試掘調査区のトレント掘りを重機で行う。

11月15日（月）晴 第2試掘調査区の埋め戻し。第3試掘調査区のトレントでは土層断面測量を始めた。

11月16日（火）晴 各トレントの断面測量と全体測量を行う。

11月17日（水）晴 測量の続きを。また、調査区の南側トレントにて遺構を確認した。第3調査区の南側と第4調査区を新めて本調査区と改名し、重機にて表土剥ぎを始めた。

11月18日（木）曇後雨 本調査区の表土剥ぎと、遺構上面確認を開始する。

11月19日（金）晴 終日表土剥ぎと上面確認を行う。

11月22日（月）～30日（火）晴 遺構上面確認と検出遺構の調査を行う。



12月2日（水）晴 1号住の平面測量と2号住の掘り下げとカマドの解体を始める。上面確認も並行して行う。

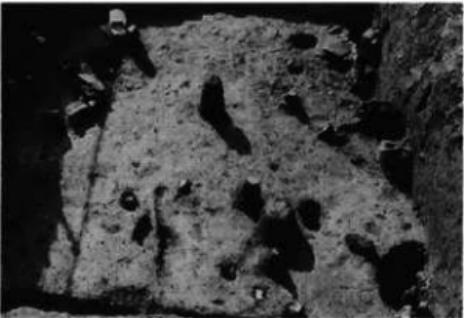
12月3日（木）曇 1号住の平面測量の続きを。2号住カマドの解体を行う。上面確認も進む。

12月4日（土）晴 1号住の測量と2号住の平面測量を行う。上面確認も進む。

12月7日（火）晴 1・2号住の測量の続きを溝状遺構の調査を始める。

12月8日（水）晴 上面確認がほぼ終了する。調査区南部の越冬のため、シート掛けを行う。1・2号住のカマドの平面測量を行う。

12月9日（木）晴 1・2号住のカマドの測量と2号住は貼り床をはがした。グリッドの設定、溝状遺構の平面測量も行う。



12月10日（金）曇後雨 1・2号住と溝状遺構の平面測量を行う。グリッド設定も継続。

12月13日（月）晴 土坑の断面測量とその後全カットを行う。

12月15日（水）晴 土坑の平面測量と本調査区北部の全体測量を行った。

12月16日（木）晴 道具の撤収を行い、本調査区南部を除く本年度分の調査を終了した。
みのわ・長野毎日新聞が取材に来た。

【平成6年度】

4月13日（水）晴 調査を再開する。シートの撤収と遺構上面再確認。

4月14日（木）晴 上面確認継続。3号住、1号掘立柱建物址、1号竪穴址の調査始める。

4月15日（金）晴 上面確認継続。5・6号住の調査と各遺構の断面測量を始める。

4月18日（月）曇 グリッドの修正と設定を行う。各遺構の測量と掘りを進める。

4月19日（火）晴 各遺構の写真撮影及び測量を進める。

4月20日（水）曇 全景写真の撮影。一部機材の撤収を行う。

4月21日（木）晴 終日各遺構の平面測量を行う。

4月22日（金）晴 各遺構の写真

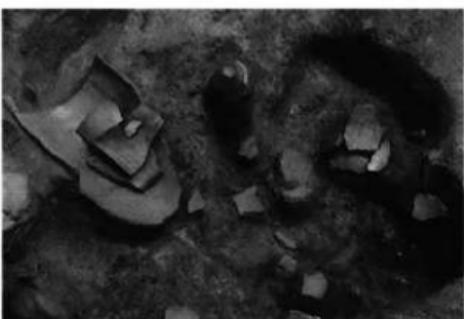
撮影、平面測量を行う。

4月25日（月）～27日（水）晴

3から6号住のカマドの解体及び測量を行う。

5月2日（月）晴 各遺構の測量、全体測量を行い、本調査区の調査を終了する。

11月2日（水）～4日（金）晴





第5試掘調査区のトレーナー掘削、測量、
埋め戻しを行う。本日にて調査は完了
した。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

箕輪町は、西は木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曾山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。また、段丘崖下には、天竜川による広大な氾濫原を見ることができる。

堂地・中道遺跡は、深沢川の沿岸に形成された、中小規模の段丘上に立地する遺跡群の一つであり、上記のとおり恵まれた自然環境の中に形成され、一時期の繁栄を誇ったのであろう。



上空より遺跡を望む

第2節 歴史環境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い好的な所といえる。町内にはそんな原始・古代人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地176箇所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。その多くは河岸段丘上及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡（1～8）と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に存在する遺跡の2つに大別することができる。本年までに行なわれた発掘例を中心前について概観してみると、縄文・弥生・平安の各時代の集落址の一端を探ることができた。また、段丘崖下には古代水田址である広大な箕輪遺跡が広がる。

今後、これらの遺跡を保護していく上でも、この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があるといえる。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中近	
1	中道	大出	扇央		○		○	○	○	昭和48年県教育委員会発掘調査実施 昭和63年発掘調査実施
2	堂地	松島	扇央		○	○		○		昭和48年県教育委員会発掘調査実施 昭和62年発掘調査実施
3	かんせん	大出	扇央					○		
4	大夫塚古	大出	扇央					○		
5	祝神	八乙女	扇央		○			○		
6	五輪	八乙女	扇央		○	○		○		昭和48年・平成5年発掘調査実施
7	松島大原	松島	扇央		○			○		平成6年発掘調査実施
8	大道上	松島	扇央		○			○		平成6年試掘調査実施
9	南大原	中原	扇央		○					昭和48年県教育委員会発掘調査実施



第2図 周辺遺跡分布図

第Ⅲ章 堂地遺跡の調査

第1節 調査方法と結果概要

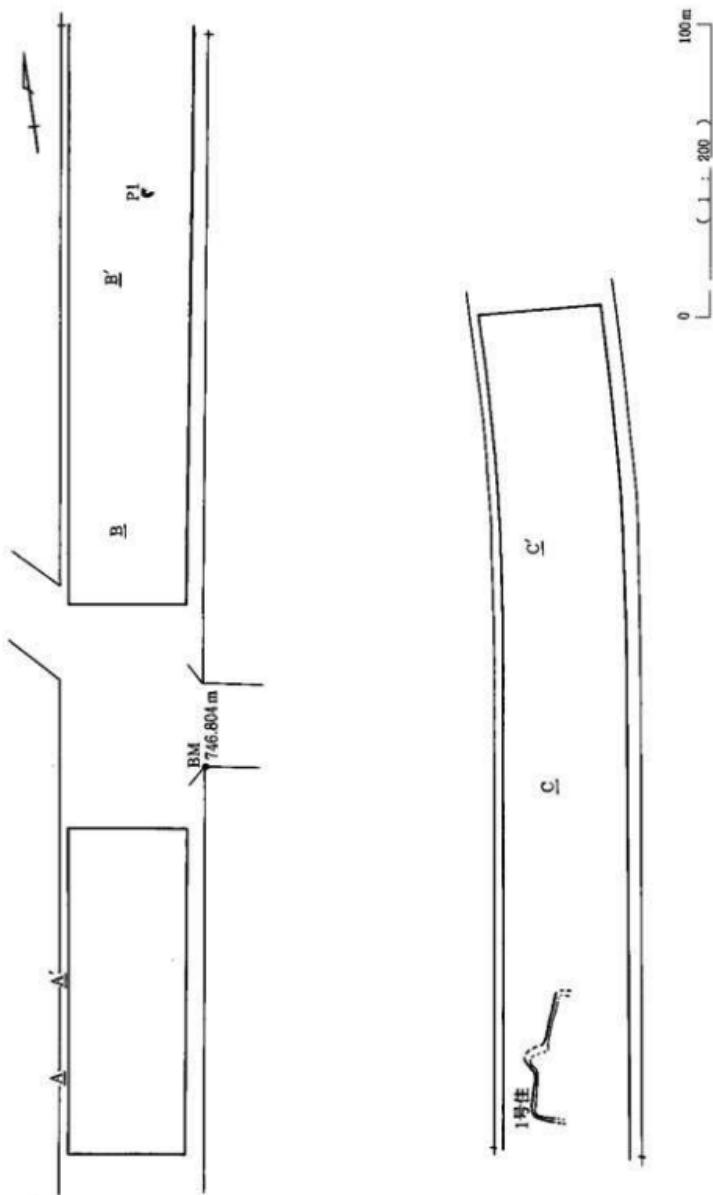
今回の調査地は、昭和48年度調査地と62年度調査地の間で、前者のおよそ80m東側に位置する。ちょうど西天竜幹線水路（以後西天竜と呼ぶ）の西側に隣接する、5m平均幅で距離がおよそ220mの、1,100m²以上が調査対象面積であった。調査地は、未舗装の農業道路、畑、そして果樹園であり、人力での掘削は容易な箇所も認められた。しかし、平成4年度としては、工事が進む中での調査のため、既に掘削されている面での遺構の確認作業。主に、掘削した箇所の土層の壁面削除による断面での遺構の確認と、土層堆積状況の記録、遺物の採集であった。確認した遺構は、住居址1軒（1号住居址）で、確認箇所に目印をしておいての内容に止めた。

翌5年度には、確認した住居址を含む、幅2.5m×50mを本調査区に設定し、他は部分的にトレンチを設定して遺構の確認と、土層堆積状況の記録を行った。道路の敷き砂利や果樹の根の混じる箇所については、ミニバックホーを導入した掘削方法であった。調査区は、トレンチが



第3図 調査区設定図

第4図 全体図



主となる特異な状況での作業のため、あえてグリッドは組まず、工事設定杭を目標に確認した遺構の位置を記録することにした。

本調査区の作業は表土除去後、手作業による遺構上面確認、遺構の掘り上げ、写真撮影・測量等の記録作業を行い、検出した遺構の種別に応じて番号を付けた。記録作業における標高の割りり出しは、調査区に隣接する水路橋に設定された工事用ベンチマーク(746.804m)を利用した。検出した遺構の概要はつぎのとおりである。

- ・竪穴式住居址－1軒（奈良時代末）
- ・ピット－1基－（時期不明）
- ・溝状遺構－1条（時期不明）

第2節 土層堆積状況

天竜川西岸の扇状地上における地質構造は、耕作土等黒褐色腐食土層→火山灰土層（テフラ層）→砂岩・粘板岩を主とする砂礫層という堆積状況が普遍的にみられる。遺構の検出は、主に耕作土下の自然堆積黒褐色土、もしくはテフラの前位層が一般的で、土地改良等による地形の削平により、テフラ確認面が遺構検出面である場合も少なくない。また多くの遺構は、テフラ層内にまで掘り込むものが多く、中には砂礫層にまで及ぶものも見られる。

I層－褐色土（7.5YR4/4）または、黒褐色土（7.5YR3/1）の耕作土等の表土。

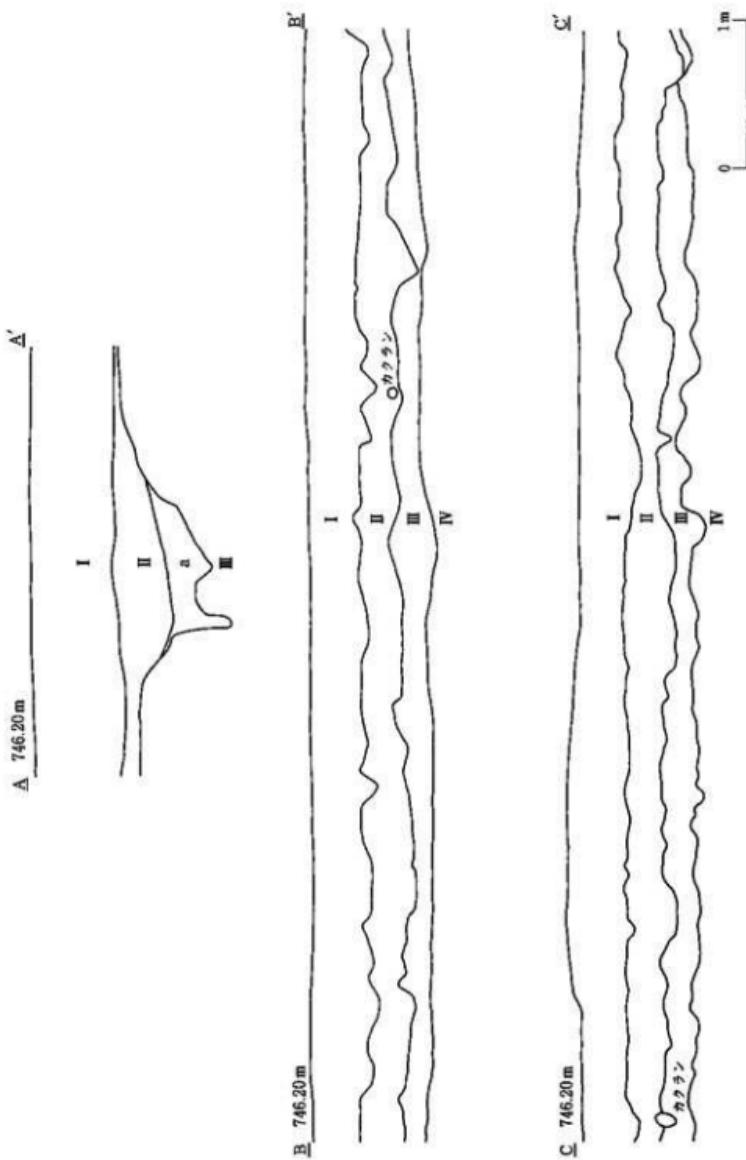
II層－黒褐色土（5YR3/1）。土器片等、遺物をまばらに含み、黑色シルトや礫はまったく含まれない。

III層－鈍い赤褐色土（5YR4/4）または灰黄褐色土（10YR4/2）。層の前位層と考えられる。

本調査地では、本層確認面が遺構検出面であった。

IV層－黄褐色土層（10YR5/6）一般的に、本地域ではローム層または赤土と呼ばれる火山灰土層（テフラ層）。

第5図 土壠堆積図



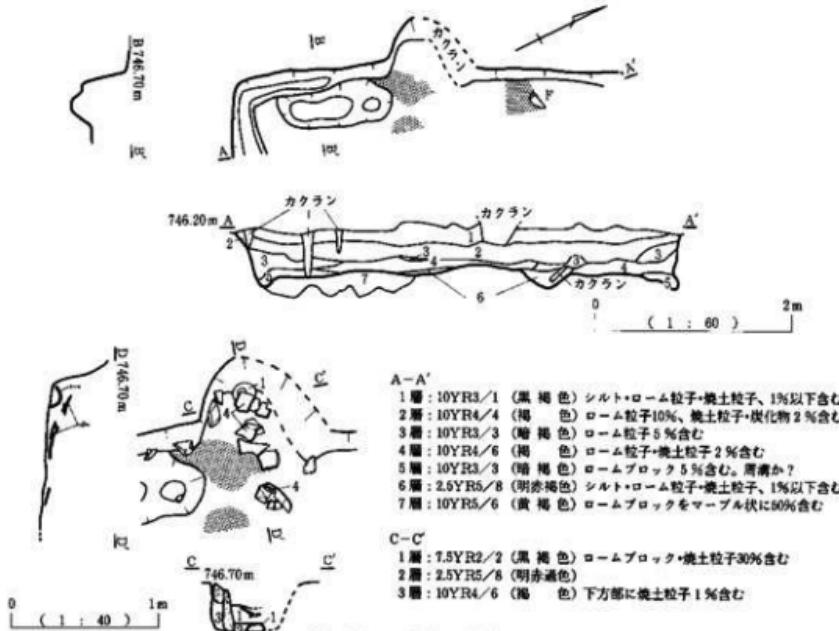
第3節 遺構と遺物

1. 住居址

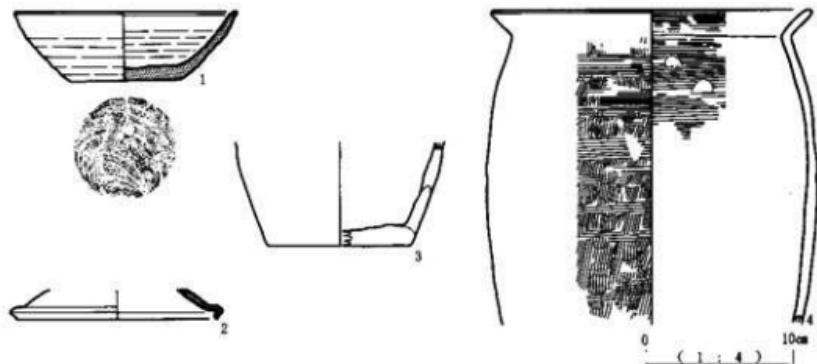
1号住居址

遺構（第6図）調査区内ベンチマークより、N-2°-E方向に26mの地点に本址は位置し、層序の第Ⅲ層検出面が遺構確認面であった。主軸は、N-75°-Wを示し、主軸に直行する一辺が7.8mを測る、隅丸方形を呈する形状と思われ、カマドは奥壁のほぼ中央部に位置する。西天竜建設時と本工事により、本址の大半が破壊を受けてしまい、カマド等の施設を含む全体のおよそ15から20%に及ぶ、主要部を中心とした箇所が残存していた。覆土は7分層され、第7層はロームブロックを主体とする貼り床であり、締まりは強固であった。またカマドの周辺を中心に、床面に火焼状況を示す痕跡が確認されている。

壁残高は、48～54cmを測る。周溝は、カマド左側の奥壁の途中から始まり、壁下を周回すると思われるが、カマドの右側には存在しない。床面からの非高差は、5～10cmを測る。また、カマドの奥壁に並行した橢円形の小穴を検出している。



第6図 1号住居址実測図



第7図 1号住居址出土土器実測図

第2表 1号住居址出土土器観察表 (法量欄:上段=口径、中段=底径、下段=器高)

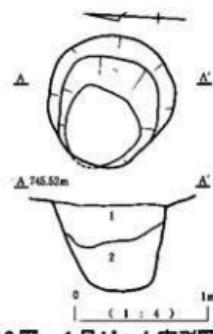
番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1	壺	(cm) 15.2 7.3 4.6	体部はやや内湾気味に開き、端部でわずかに外反する。 底部平底。	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	胎土は小石、砂粒を含む。 二次焼成を受けている。外面に一部内面に多量にタール状の炭化物付着。色調5Y6/2(灰オリーブ色)
2	蓋	— (13.6) (2.0)		外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	内外面供、炭化物付着。 天井部欠損。 色調5Y6/2(灰オリーブ色)
3	甕	— (9.8)	底部平底。	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	胎土は砂粒を多く含む。 色調7.5YR7/6(橙色)
4	甕	(21.2) — (21.2)	口縁部は「く」の字状に外反する。	外面 間隔を開けた横位ハケ後、継位ハケ充填 内面 口縁部、同上部横位ハケ、それ以外はナデ	内外面供、一部に炭化物付着。 色調7.5YR6/4(にぶい橙色)

カマドは、その右側約40%が搅乱を受けていた。内部壁面の一部と思われる立石と裏止めの自然石が若干確認されたものの、袖部の残存ではなく天井部等の痕跡も認められなかった。火焼床は、あまり火熱を受けた痕跡が少なく、使用度は低いものと考えられる。

遺物(第7図)須恵器は壺(1)・蓋(2)、土師器は甕(3, 4)がみられ、カマド内とカマドの前面にその出土が集中している。特に1の壺は、カマド中央部の床面の奥壁に接触した箇所に、口縁部を下にした状態で出土し、カマドの火力で受けたと思われる、二次焼成の痕跡が底部に認められた。出土遺物から、本址は奈良時代末から平安時代初期に位置づけられよう。

2. ピット

調査区ベンチマークから、N-2°-E方向に19.5mに位置する。84×90cmの円形を呈し、58cmの深さを測る。底面はほぼ平だが、掘り込みが斜め方向であるため、やや一方の壁面に片寄りをみせる。覆土は2分層され、1層は黒褐色土(5YR3/1)で、2層は灰黄色土(10YR4/2)。遺物は無く、時期の判定はできない。



第8図 1号ピット実測図

第IV章 中道遺跡の調査

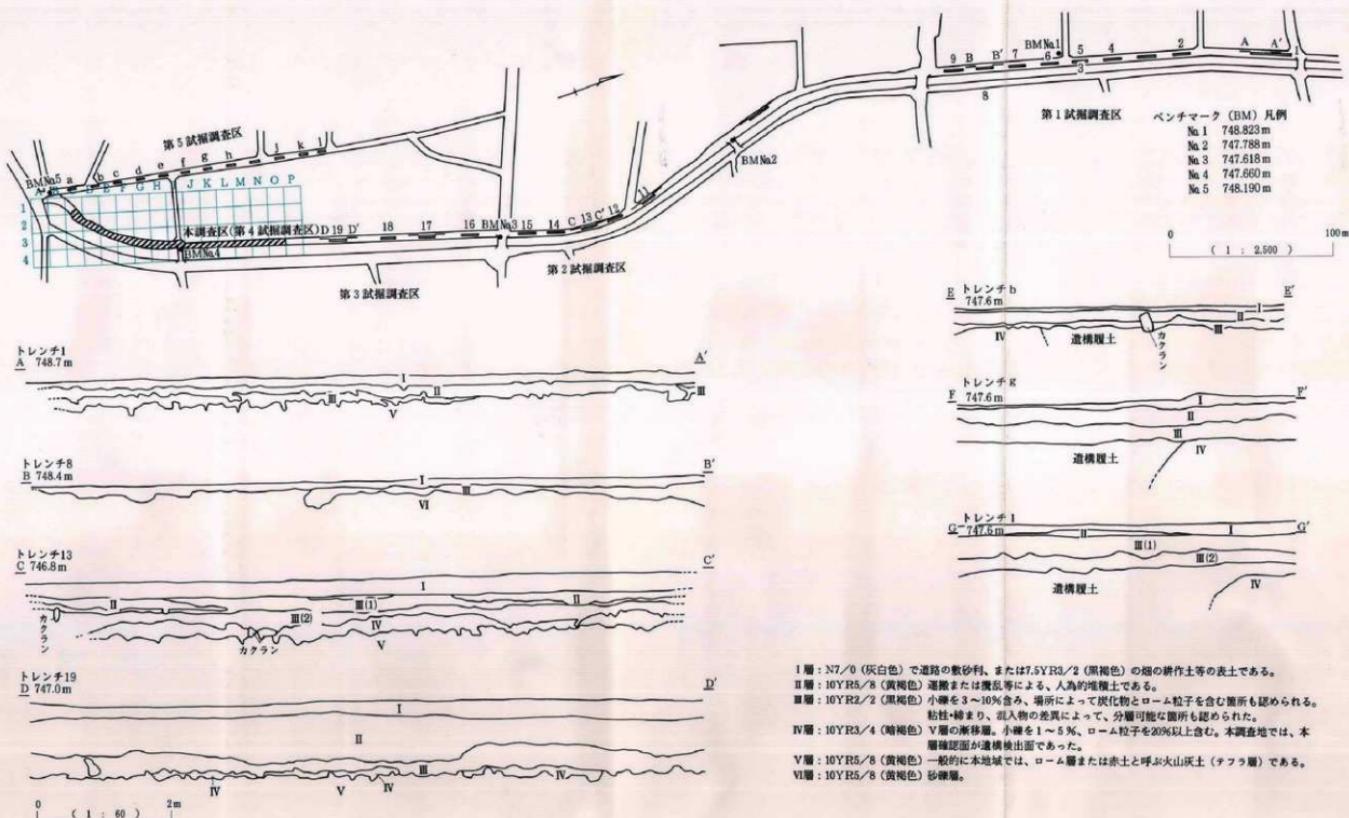
第1節 調査方法と結果概要

中道遺跡調査区（第9図）は、その南端部が昭和48年度調査地（現中央自動車道）から、西におよそ75mの位置にあり、その遺構検出結果を参考にし、堂地遺跡調査区と同様、西天竜の西側添いに5m幅で、距離がおよそ1,000mの5,000m²以上の工事対象全面積を今回の調査対象とした。調査地の地目は、堂地遺跡調査区とほぼ同じ、未舗装の農業道路、畠地であり、特に前者がその8割を占めていた。

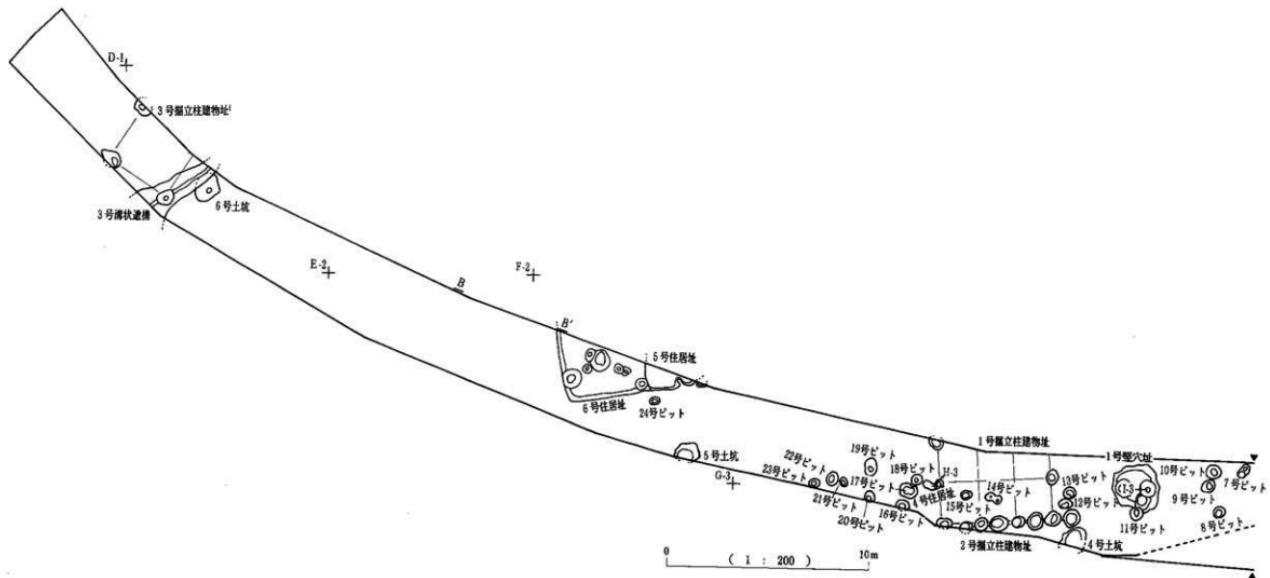
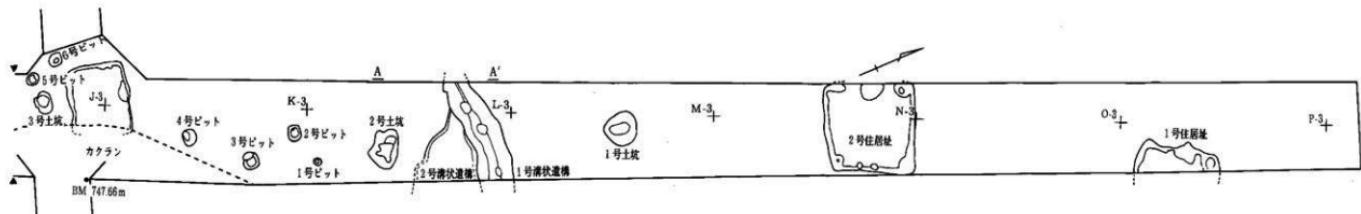
調査はまず、遺跡包蔵地の範囲と同時に本調査対象範囲を確認するため、調査区の北側から農業道路の中央部に、1.5×10mでおよそ10m間隔のトレンチを設定し、ミニバックホーを使用しての試掘調査から取りかかった。調査区は、南北に長い変則的な調査範囲のため、東西に直行する幹線道路を基本に、北から4ヶ所に試掘調査区を区切り、トレンチ名も北からローマ数字で呼称した。中でも南端部にあたる第4試掘調査区は、遺構・遺物の集中する可能性が高い箇所と予測されるため、更に梅の木の保護も考慮し、重機による掘削は避けて10m間隔で5×2mのトレンチ設定で手掘りによる試掘を行った。

試掘の結果、各トレンチの土層は、かつては小河川の流路を匂わせる部分的に特異な堆積状況を示す箇所が認められたが、同類と観察できる堆積層の深度に若干の差異が生じるだけで、基本的な安定した土層堆積状況を示していた。しかし、第4試掘調査区全域並びに第3試掘調査区の一部を含めた、南端部からおよそ110mまでの範囲のみに住居址等の遺構が確認でき、この箇所を本調査対象地区に協議決定し、試掘調査終了後引き続いてその調査を行った。

本調査は、試掘調査結果の遺構確認層の10cm上まで大型バックホーで表土を除去し、その後手作業による遺構上面確認、グリッドの設定、遺構内堆積土の掘削及びその断面測量作業、写真撮影・平面測量等の記録作業の手順で進めた。検出した遺構は、種別ごとに検出順で番号を付けた。グリッドは、現地で細長い調査区に併せたため、任意にN-19°-Eに主軸をとった10m四方の設定で、主軸方向を南からアルファベットで、直行方向を西からローマ数字を用いて呼称した。記録作業における標高の割り出しは、試掘調査区は近接する水準点から各区に標高移動を行って任意に設定し（BM・NO 1～3・5）、本調査区については調査区に隣接する水路橋に設定された工事用ベンチマーク（BM・NO 4）を利用した。また、本開発事業関連に伴う管理道路建設部については、1.5×5mのトレンチを10m間隔で12ヶ所設定し、ミニバックホー・手作業で掘削し、土層堆積状況の記録及び遺構の確認を行った。協議の結果、遺構への影響の



I層: N7/0 (灰白色) で道路の敷砂料、または7.5YR3/2 (黒褐色) の畑の耕作土等の表土である。
 II層: 10YR5/8 (黄褐色) 連續または攪乱等による、人為的堆積土である。
 III層: 10YR2/2 (黒褐色) 小礫を1～10%含み、場所によって炭化物とローム粒子を含む箇所も認められる。
 IV層: 10YR3/4 (暗褐色) V層の漸移層、小礫を1～5%、ローム粒子を20%以上含む。本調査地では、本層確認箇所が遺構層出面であった。
 V層: 10YR5/8 (黄褐色) 一般的に本地域では、ローム層または赤土と呼ぶ火山灰土 (チカラ層) である。
 VI層: 10YR5/8 (黄褐色) 形成層。



第10図 全体図

及ばない中の開発を考慮し、試掘のみでの調査にとどまった。

- 検出した遺構の概要は、次のとおりである。
- ・竪穴式住居址 - 6軒（奈良・平安時代）
 - ・掘立柱建物址 - 3棟（奈良・平安時代）
 - ・竪穴状遺構 - 1基（奈良・平安時代）
 - ・土坑 - 6基 - （縄文時代中期初頭、時期不明）
 - ・ピット - 24基 - （奈良・平安時代、時期不明）
 - ・溝状遺構 3条 - （奈良・平安時代）

第2節 土層堆積状況

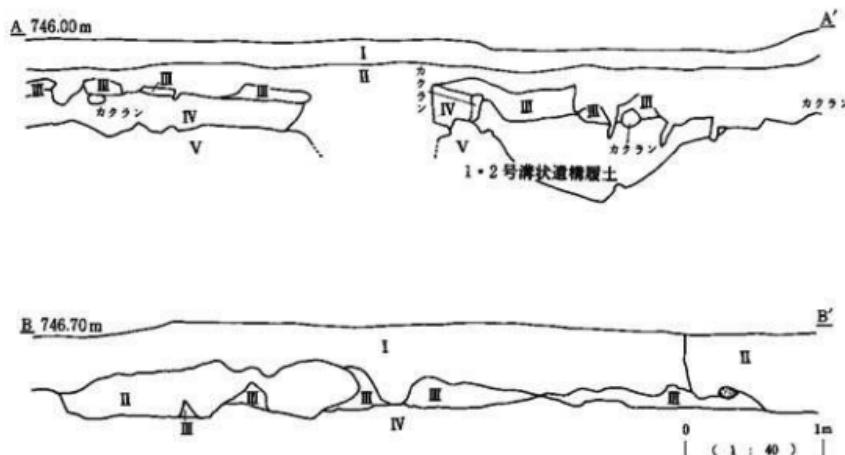
I層 - 褐色土 (7.5YR4/4) または、黒褐色土 (7.5YR3/1) の耕作土等の表土。

II層 - 黄褐色土 (10YR5/8) 運搬または攪乱による、人為的堆積土である。

III層 - 黒褐色土 (10YR2/2)。小礫を3~10%含み、場所によって炭化物とテフラ粒子を含む箇所も認められた。本調査区では、土器片等、遺物をまばらに含んでいる。

IV層 - 暗褐色土 (10YR3/4)。V層の漸移層と考えられる。本層確認面が遺構検出面であった。

V層 - 黄褐色土層 (10YR5/8) 一般的に、本地域ではローム層または赤土と呼ばれる火山灰土層（テフラ層）。



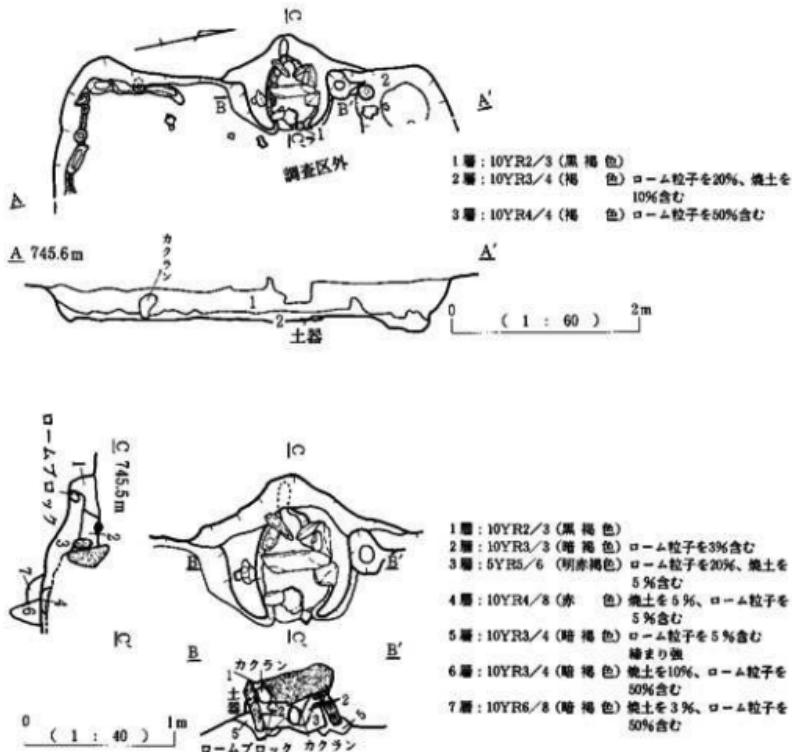
第11図 本調査区土層堆積図

第3節 遺構と遺物

1. 住居址

1号住居址

遺構（第12図）調査区の北東、P-4グリッドに位置する。N-80°Wに主軸を指し、主軸に直行する一辺が3.9mを測る、隅丸方形を呈するプラン形状と推定する。惜しくも本址の約70%は、西天竜建設時に消滅し、そのプラン及び付属施設等の内容は不明と言わざるをえない。幸うじて、遺物の集中するカマドとその周辺部が残存していたのは幸いであり、本址の特徴と出土遺物の豊富さで、時期判定の根拠を見いだすことがでた。覆土は2分層され、カマド周辺



第12図 1号住居址実測図

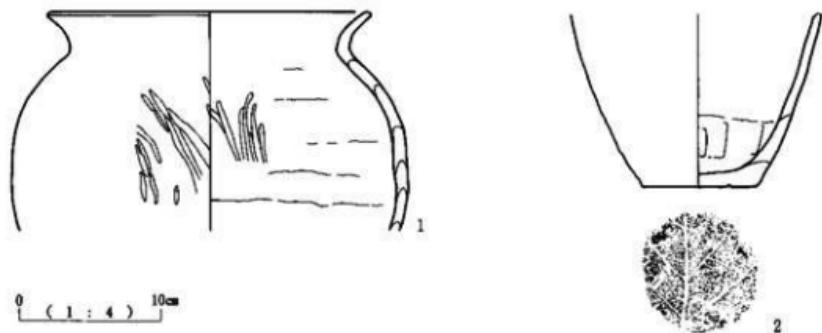
部と言つてもあってか、全体的に焼土混じりの胎土であった。床は全体的に堅く締まっていたが、貼床は行っておらず、地山のテフラを叩き締めた状態を観察した。

壁残高は、27~42cmを測り、部分的に西天竜建設機械土が侵入していた。周溝は、カマドの左側に一部間隔をおき、比較的浅めの溝が掘り込まれ、カマドの右側はそれがなく、コーナーにかけて、90cm前後の径を測り床面から15~20cm深さの土坑状の落ち込みが確認された。

カマドは、奥壁の中央部や右側に位置し、袖部は暗褐色の粘土を主に構成された石芯粘土カマドである。特に、前方部の袖には芯石の抜けた痕跡が認められ、また中心から奥の煙道にあたる箇所には、内側が火焼状況を示す立石（芯石）の上に、天井石が乗った出土状態であった。

しかし床面は、火熱を受けた痕跡は少なく、使用度の低い印象を受けた。

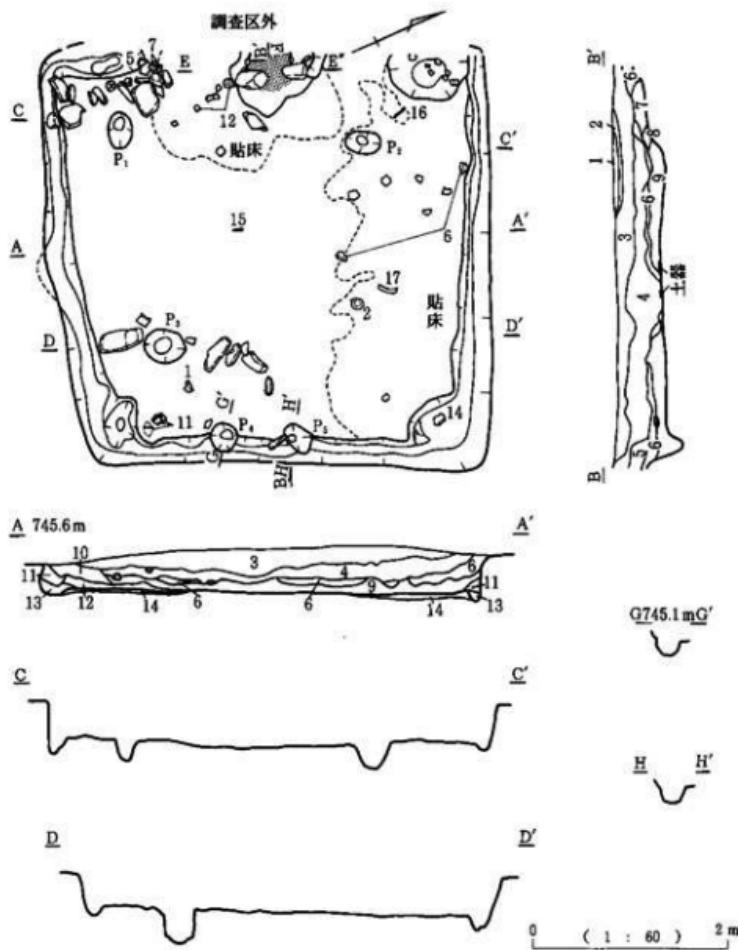
遺物（第13図）須恵器は高台付壺・壺、土師器は甕（1・2）が、カマド内とその前方及び両脇、カマド脇の土坑内に集中して出土していた。1の甕はカマド内、カマド前方から出土し、短く開く「く」の字状の口縁部の球状を呈する形状で、内外面に太めのヘラミガキによる器面調整が施される。2は、外面に吹きこぼれのような炭化物の付着が認められる甕の胴下半部で、カマド右脇の土坑内から出土している。圓化した土器は少ないが、これらの特徴から本址は、古墳時代最終段階の様相を伺わせるが、奈良時代初段階に時期判定を考える。



第13図 1号住居址出土土器実測図

第3表 1号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	調 整	備 考
1	甕	— (21.6) — (14.7)	口縁部「く」の字状 に外反し、胴部は球 状を呈する。	外面 口縁部ヨコナデ 胴部ナデ後 ヘラミガキ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部ナデ後 ヘラミガキ	内面 炭化物付着 胎土 霧母、白色粒子含む 色調7.5YR6/4(にぶい橙色)
2	長 胴 甕	— (13.6) (2.0)		外面 ナデ、底部木葉痕 内面 ヘラナデ、底辺部横方向 のヘラナデ痕	外面 炭化物付着 胎土 霧母、白色粒子含む 色調10YR7/4(にぶい黄橙)



- 1層: 10YR3/2 (黒褐色) 10YR6/6 (明黄褐色) を30%含む
- 2層: 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を1%含む
- 3層: 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を2%、焼土を1%含む
- 4層: 10YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を20%含む
- 5層: 10YR2/1 (黒褐色)
- 6層: 10YR2/2 (黒褐色)
- 7層: 10YR3/3 (暗褐色) 従5mmのローム粒子、焼土を10%含む
- 8層: 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を30%含む
- 9層: 10YR2/3 (黒褐色) 焼土を1%含む
- 10層: 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子、焼土を1%含む
- 11層: 10YR3/1 (黒褐色) ローム粒子を1%含む
- 12層: 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を1%含む
- 13層: 10YR2/2 (黒褐色)
- 14層: 2.5Y4/6 (オリーブ褐色) 貼床 2.5Y3/1 (黒褐色) を30%、半以下の繊維を1%含む

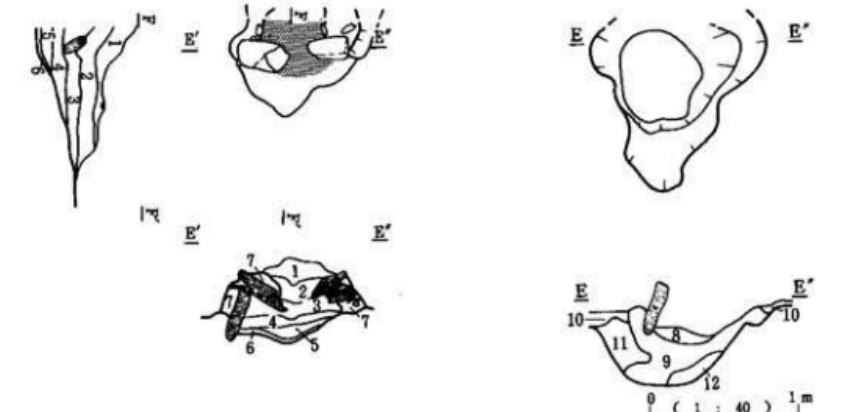
第14図 2号住居址実測図

2号住居址

造構(第14図)調査区の北東、N-3・4グリッドに位置する。主軸をN-70°-Wを指し、主軸方向に直行する一边が4.53mを測る、隅丸方形を呈するプラン形状である。カマドを一部含む奥壁部は、調査区から外れるため、約90%の確認であった。覆土は14分層できた。部分的に第14層の貼り床が認められ、地山のテフラ(層)を叩き締めた箇所との構成で、かなり堅い床面を作成していた。

壁残高は、27~54cmを測り、壁の一部に抉りの入る箇所も確認した。周溝は、カマド周辺部を除いて壁下全域に作成され、前壁のコーナー部には土坑ないしピット状に幅広く拡張されていた。ピットは、P₁(38×24×21cm)、P₂(36×24×27cm)、P₃(42×35×36cm)、P₄(30×32×15cm)、P₅(30×32×18cm)の5穴で、P_{1~4}は柱穴と考えられ、P₅は出入口部に係わる何らかの痕跡と考える。また奥壁右側コーナーには、54×(30)×25cmの土坑状の落ち込みを確認した。

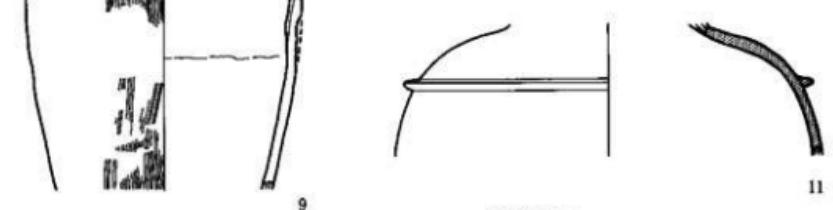
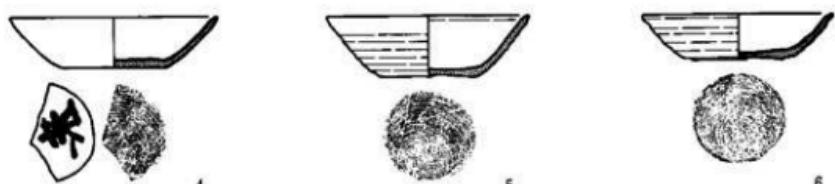
カマドは、奥壁ほぼ中央部に位置し、テフラを主体とする粘土(7層)と転石で構成した石芯粘土カマドである。袖部芯石の内側は火焼状況を示し、天井部と思われる芯石とそれを構成する袖部と同じ粘土が残存していた。火焼床面は、堅くそして強度の火熱を受けて明赤褐色を帯び、更にそれが2分層(5・6層)された。またカマドの下には、120×(120)×52cmの不整形な土坑が確認されたが、遺物はなく本址との関連性はつかめなかった。



- 1層: 10YR2/2 (黒褐色) 2.5YR6/6 (明黄褐色) を5%含む
 2層: 10YR2/3 (黒褐色) 2.5YR4/8 (赤褐色) を1%、2.5YR6/6 (明黄褐色) を1%含む
 3層: 10YR2/3 (黒褐色) 2.5YR6/6 (明黄褐色) を1%、半大の礫を2%、炭化物をわずかに含む
 4層: 10YR4/3 (純い黄褐色)
 5層: 5 YR5/8 (明赤褐色) 粘土
 6層: 5 YR5/6 (明赤褐色) 粘土
 7層: 2.5Y6/6 (明黄褐色) 10YR2/3 (黒褐色) を20%含む 締まり強

- 8層: 5 YR2/1 (黒褐色)
 9層: 10YR2/3 (黒褐色)
 10層: 10YR5/4 (純い黄褐色)
 11層: 10YR5/4 (純い黄褐色) 10YR3/2 (黒褐色) を50%、直径3~5 cmの礫をまばらに含む

第15図 2号住居址カマド・カマド下土坑実測図

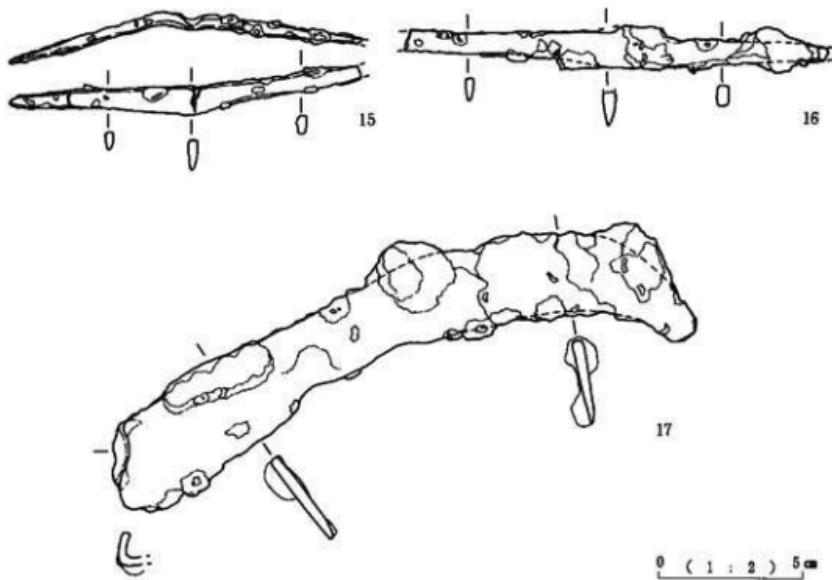


0 (1 : 4) 10cm

第16図 2号住居址出土土器実測図

第4表 2号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1	高台 壺	(cm) (13.2) 9.6 3.9	体部は直線的に開き、端部でわずかに外反する。	外面 ロクロナデ、底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け。 内面 ロクロナデ	胎土は白色砂粒を含む。 色調 外面 N4/0(灰色) 内面 7.5YR4/2(灰褐色)
2	壺	12.6 6.8 4.2	体部は内湾気味に開く。 底部平底。	外面 ロクロナデ、底部回転ヘラ切り 内面 黒色処理。横位ヘラミガキ後、放射状ヘラミガキ(暗文?)	胎土は砂粒を多く含む。 色調 7.5YR7/6(橙色)
3	壺	(12.6) (6.8) 3.8	体部は内湾気味に開き、端部でやや外反する。	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	色調10YR5/3(にぶい黄褐色)
4	壺	(14.2) (6.8) 3.4	体部は直線的に開く。 底部平底。	外面 ロクロナデ、底部回転系切り 内面 ロクロナデ	灰白色砂粒を含む。墨書き器(文字解読不可能) 色調5Y6/2(灰オリーブ色)
5	壺	13.8 6.7 4.1	体部は直線的に開く。	外面 ロクロナデ 底部回転系切り 内面 ロクロナデ	焼成不良 色調 外面 2.5Y6/1(黄褐色) 内面 2.5Y7/2(灰黄色)
6	壺	13.0 6.1 3.5	体部は直線的に大きく開き、端部でやや外反する。	外面 ロクロナデ 底部回転系切り 内面 ロクロナデ	色調 5BG4/1(暗青灰色)
7	壺	(13.0) 3.2 (3.6)	体部は直線的に開く。	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	外面 口縁部わずかに自然釉付着。 色調10YR6/2(灰黄褐色)
8	壺	- 2.7 (0.8)		外面 ロクロナデ 底部回転系切り 内面 ロクロナデ	胎土は灰白色砂粒含む。 色調10YR6/2(灰黄褐色)
9	長 胴 壺	(20.2) - (22.5)	口辺部「く」字状に短く外反する。	外面 口縁部ハケ後ヨコナデ、 胴部ハケ 内面 口縁部ハケ 脇部ナデ	胎土は雲母、石英を含む。 色調 外面 7.5YR6/8(橙色) 内面 10YR7/4(にぶい黄褐色)
10	壺	(24.0) - (5.0)	口辺部「く」字状に外反する。	外面 口縁部から脇部ロクロナデ、 胴部タタキ 内面 口縁部から脇部ロクロナデ、 胴部タタキ(青海波文)	胎土は緻密で、焼成良好。 色調2.5Y7/2(灰黄色)
11	壺	(13.4) - (8.9)	肩部に断面三角形の突帯貼り付け。 凸帯付四耳壺	外面 タタキ 内面 ナデ	外面自然釉付着。 色調 外面7.5Y4/2(灰オリーブ色) 内面2.5Y6/2(灰黄色)
12	小型 壺	(8.6) 6.0 8.6	口辺部「く」字状に短く屈曲し、胴部は球状を呈する。	外面 ロクロハケ、胴部板状工具によるロクロナデ 内面 ロクロハケ	胎土は小石、砂粒を含む。 色調 外面7.5YR6/4(にぶい橙色)
13	壺	- (21.2) (0.5)		外面 タタキ 底部周縁ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	外面指紋痕を有す。 色調 外面10YR5/3(にぶい黄褐色) 内面10YR4/4(褐色)
14	壺			外面 ナデ 底部ヘラケズリ(?) 内面 ヘラナデ	胎土は砂粒を含む。 色調7.5YR7/4(にぶい橙色)



第17図 2号住居址出土鉄器実測図

第5表 2号住居址出土鉄器観察表

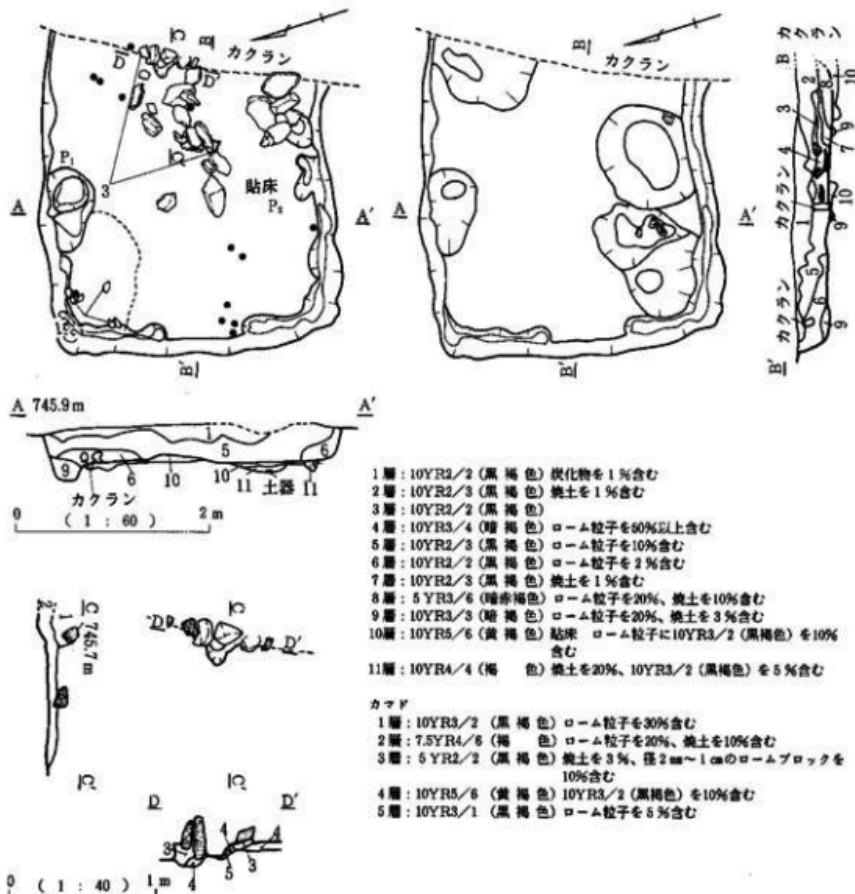
(法量欄: 上段=長さ、中段=幅、下段厚さ)

番号	器種	法量(cm)	重さ(g)	特徴
17	鎌	20.5 3.0 0.5	85.0	「返し」が左側につき、それに対する身が直線的である。
15	刀子	(12.0) 1.1 0.3	9.6	茎の一部が欠損。刃部は片側で浅い。平練作り。
16	刀子	(14.4) 1.2 0.4	17.1	切先と茎の一部が欠損。棟闊のみ。平練平作り。

遺物（第16図）須恵器は高台付壺（1）、壺（3～8）、甕（10・13）、凸蒂付四耳甕（11）が、土師器は壺（2）、長胴甕（9）、甕（14）、ロクロ成形の小型甕（12）が、そして鎌（17）、刀子（15・16）等の鉄器が出土している。カマドの両脇及び前方部の床直上と、土坑等の内部施設からまとまった遺物の出土がみられた。これらの遺物から本址は、平安時代前期に時期判定を考える。

3号住居址

遺構（第18図）調査区のほぼ中央、J-3・4、K-3・4グリッドに位置する。N-73°-E



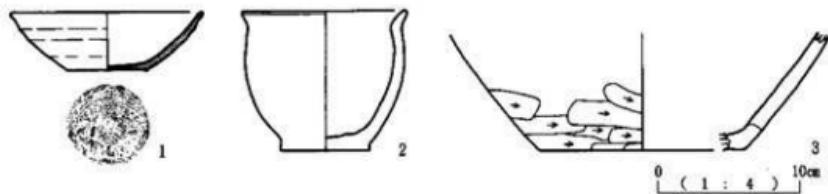
第18図 3号住居址実測図

に主軸を指し、主軸と直行する一边が3.0mを測る、隅丸方形を呈するプラン形状と思われる。カマドを一部含む奥壁は、西天竜に掛かる橋架建設時に消滅し、全形状は確認不可能だった。覆土は11分層でき、10層は貼床、11層は床下埋土と観察し、共に締まりは堅固であった。床の状態は、2号住居址と比較すると全体的に軟弱で、特にカマドの左側コーナー付近は貼床の残骸らしきテフラの粒子が表面を覆っていた。

壁残高は、29~39cmを測る。周溝は前方部左右のコーナー部のみ確認し、前方壁ほぼ中央部に出入口を伺わせる周溝の途切れが存在する。ピットは、左壁下中央部にP₁(81×48×30cm)、右壁下中央部にP₂(48×30×25cm)を確認した。また床下は、カマド左側コーナーと床の右側で床面積の約30%に土坑状の緩やかな落ち込みがあり、焼土を多く含むのみならず土器等の遺物も多く出土している。

カマドは、その主要部は既に消滅し、芯石と推測する立石を伴う左側袖部と火焼床の一部が確認できた。

遺物(第19図)須恵器は壺(1)、土師器は甕(3)・小型甕(2)があり、全体の出土量に対し器形をとどめる点数は少なかった。また3は、土師器の甕と器種判断したが、大きく逆「ハ」の字状に立ち上がる形状と、それから推測する全体の大きさや底部の欠損部に観察する微妙な屈曲状況と、器面調整など、種別と器種の特定ができない。本址は、平安時代前期に位置づけておく。



第19図 3号住居址出土土器実測図

第6表 3号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	調整	備考
1	壺	(13.2) 5.6 3.9	体部は直線的に開き 底部平底。	外面 ロクロナデ 底部回転糸切り 内面 ロクロナデ	焼成良好。 胎土は白色砂粒やや含む。 色調2.5Y7/1(灰白色)
2	小型甕	(11.1) (6.0) 9.4	口縁部「く」の字状に 短く外反し、胸部は ゆるく膨らむ。 底部平底。	外面 ナデ? (二次焼成により、 器面の觀察不可能) 底部木葉模 内面 ロコナデ	焼成不良。 色調7.5YR5/3(にぶい褐色)
3	甕	— (13.8) (7.9)		外面 胸部ヘラナデ、底辺部ヘ ラナデ後、ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	胎土は白色砂粒含む。 内面炭化物付着。 (断面) 10YR7/4(にぶい黄褐色) 色調2.5YR6/6(橙色)

4号住居址



第20図 4号住居址カマド実測図

遺構（第20図）G-3・4、H-

3・4グリッドに位置する。本址は、

焼土を多量に混入する、テフラを

主体とするオリーブ黄色土（5Y6/4）

で構成された、カマドの残骸と捕

らえていた。その周辺部は、貼床の残骸と思われる堅いテフラのブロックが面的に検出され、崩壊した住居址との見方をしていた。住居址以外の遺構の、何らかの残骸であることも想定できよう。

遺物（第21図）須恵器の壺（1）のみで、時期判定は困難である。カマド跡と想定していたテフラの固まりの検出部からは、1の壺胴部片がまとまって出土し、また焼成跡がない人頭大の転石も出土している。更に1は、15号ピット内より、接合する破片が出土していることに注目できる。

第7表 4号住居址出土土器観察表

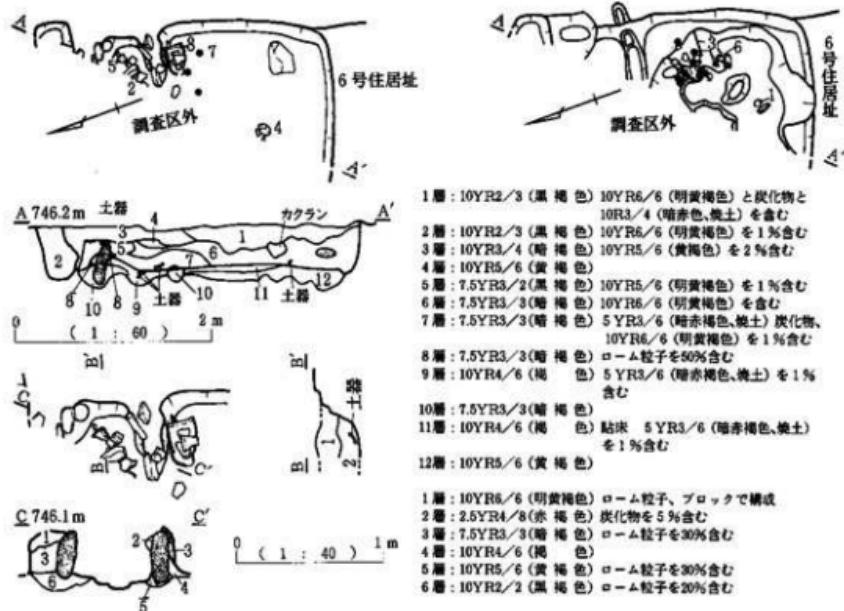
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	調 整	備 考
1	壺	— (23.9)	肩部が強く張り出し、 胴部は緩やかな球状 を呈する。 (15号ピットより同 一片出土)	外面 タタキ 内面 ナデ	外面 肩部に自然軸付着 胎土 よく精選され緻密 色調 外面7.5R2/3（極暗赤褐色） 内面10BG6/1（青灰色）

5号住居址

遺構（第22図）調査区の南方、G-3グリッドに位置し、6号住居址とは重複関係にあり、本址はそれを切って構築している。調査区内での本址の検出は、全体の20~30%あまりであり、カマドの主要部を含むその周辺部しか確認できなかった。奥壁中央部にカマドを配する隅丸方形を呈するプラン形状と推測され、主軸はN-70°-Eを指す。確認できた奥壁の長さは3.0mを測るが、カマドの位置がかなり左方に寄っていることとコーナー部が調査区境に掛かるることを考慮すれば、実際の形状及び大きさは予測し得るデータでは乏しいと思われる。覆土は12分層



第21図 4号住居址出土土器実測図



第22図 5号住居址実測図

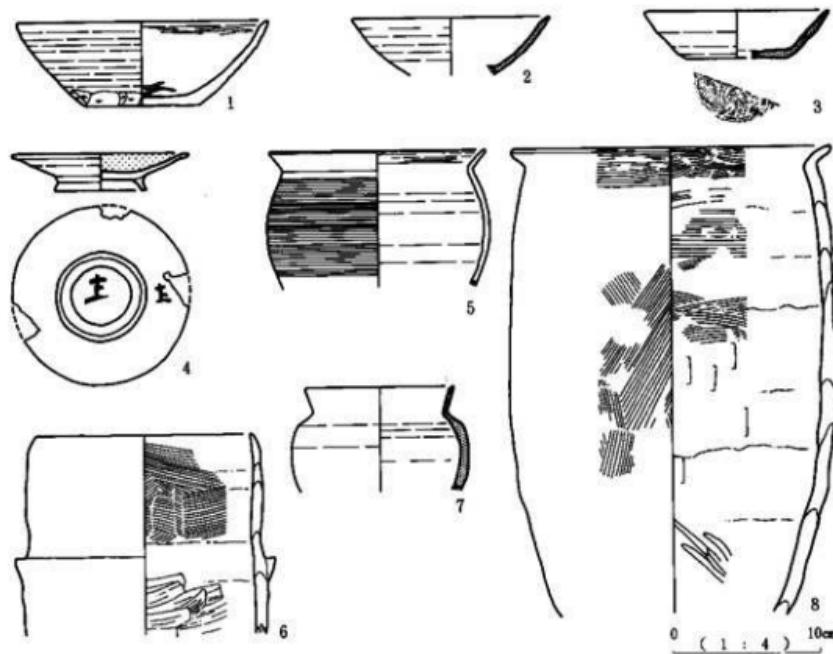
でき、11層は粘床、12層は粘床ないし床下埋土と捕らえる。また、確認できた床は、堅固に叩き締められていた。

壁残高は、30~42cmを測る。他の遺構との切り合い関係は確認できなかったが、カマドの左側には、袖部に隣接してピット状の落ち込みが確認できた。また周溝は、溝を形成するほどのはっきりとした窪みは認められなかった。

カマドは、3層からなる粘土と転石を用いた芯石とで袖部が構成され、煙道箇所は奥壁ラインに添い、あまり突出していない。床は、著しい火焼状況はなく、さほど堅くない。

カマドの右脇床下からは、土坑状の落ち込みが掘りこまれ、遺物も破片が主であるが、豊富に埋没していた。

遺物（第23図）須恵器は壺（2・3）、短頸壺（7）、土師器は壺（1）、皿（4）、長胴壺（8）、ロクロ成形の小型壺（5）、円筒形土器（6）等、遺構の検出割合にしては、器種構成が豊富と言える。また、覆土ないし床直出土と床下出土の土器では、あまり大きな特徴の差は感じられなかった。7は胎土・焼成・色調等の観察から、美濃須恵器窯製の移入品と考える。6は口縁部が鋭角に作出され、胴部に受け部のような瓣状の突起を有し、一見円筒埴輪を想像させる形態である。しかし、これらの特徴が他の出土例に見るそれとは類似点に乏しい。これらの出土土器から本址は、奈良時代末から平安時代前期に時期区分を想定する。



第23図 5号住居址出土土器実測図

第8表 5号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	調 整	備 考
1	壺	(17.0) (7.8) 5.7	体部はやや内湾気味に開き底部平底。	外面 ロクロナデ、底部ヘラキ リによる切り離し後、底 辺部ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	胎土は砂粒を多く含む。 色調 外面5YR5/4 (にぶい赤褐色)
2	壺	(6.7) — (3.9)	体部は内湾気味に大きく開き、端部でやや外反する。器厚が薄い。	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	胎土は砂粒を多く含む。 色調2.5Y8/4(淡黄色)
3	壺	(12.4) (6.8) 3.2	体部は直線的に開き、底部平底。	外面 ロクロナデ 底部回転糸切り 内面 ロクロナデ	色調2.5Y5/2(にぶい黄褐色含む 暗灰黄色)
4	皿	12.0 6.2 2.5	体部は直線的に大きく開く。	外面 ロクロナデ、底部回転糸 切り後、高台貼り付け。 ロクロナデ後、黒色処理	胎土は砂粒を含む。墨書き土器(文 字解読不可能) 色調10YR6/3(にぶい黄橙色)

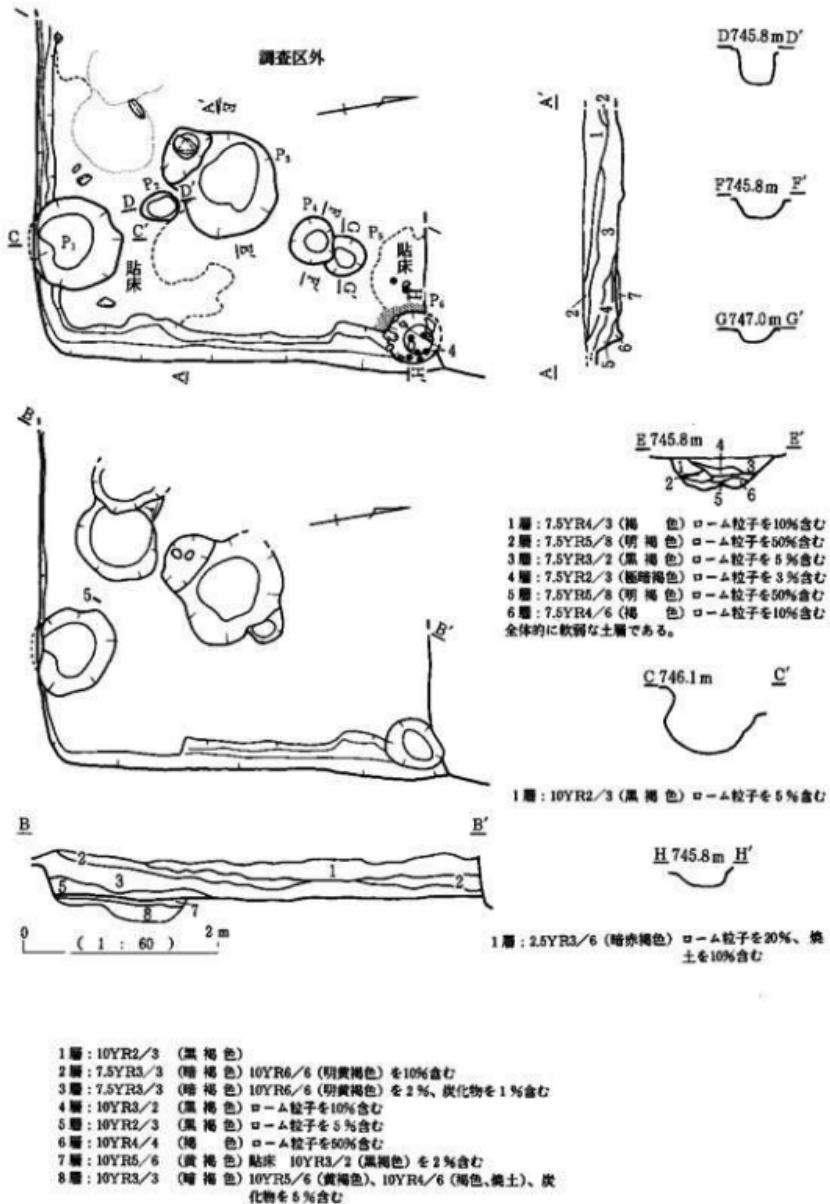
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	調 整	備 考
5	小型 甕	(14.6) — (9.2)	口縁部「く」の字状に短く外反し、胴部は球状を呈すると思われる。	外面 口縁部ロクロナデ、胴部板状工具によるロクロナデ 内面 ロクロナデ	炭化物多量に付着。 色調 外面2.5YR6/8(褐色) 内面10YR8/6(浅黄褐色)
6	円筒 形土器	(14.6) — (13.4)		外面 ヘラナデ、胴部中位の縫は貼り付け後ナデ(指痕が認められる。) 内面 ハケ及びヘラナデ	胎土は雲母、乳白色砂粒を含む。 色調10YR5/4(にぶい黄橙色)
7	短 甕	(10.1) — (7.0)	口縁部「く」の字状に外反し、頭部と胴部の境に縫を有する。胴部は球状を呈する。口縁部の器厚が薄い。	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	内面に自然釉付着。白色砂粒が含まれる。 色調7.5Y6/1(灰色)
8	長 甕	(21.6) — (31.5)	口縁部「く」の字状に短く外反する。	外面 ハケ 内面 口縁部、胴上半部ハケ 胴中央部ヘラナデ 胴下半部ヘラミガキ	胎土は雲母を含む。 外面炭化物が多量に付着。 色調10YR6/4(にぶい黄橙色)

6号住居址

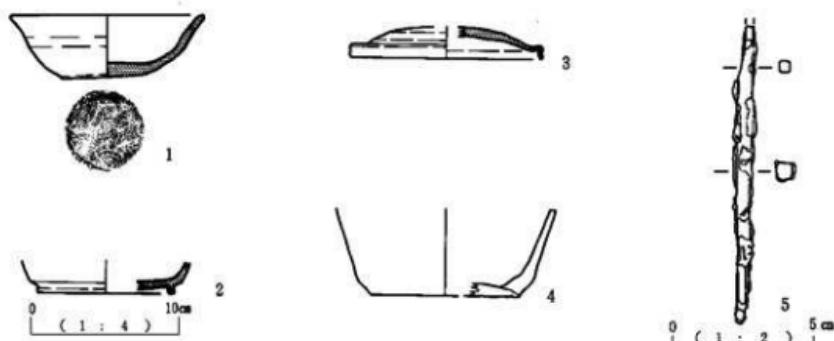
遺構(第25図)調査区の北側、G-3グリッドに位置する。5号住居址と重複関係にあり、本址はそれに切られる。5号住居址と同様調査区塊の検出で、カマドを含む主要部は調査区外に埋没し、全体のおよそ40~50%の確認となった。埋没するカマドを西側壁ほぼ中央部と想定し、確認した南側壁を基準とした場合、主軸はN-78°-Wを指すものと思われる。本址のプラン形状は、他と同様に隅丸方形を呈すると考えられるが、その規模を推定し得るだけの情報は少ない。覆土は8分層でき、第7層は堅固な貼床で、第8層は床下に確認した土坑状の落ち込みに焼土・炭化物を含む堆積土であった。その床は、全体的に堅く叩き締められ、確認した床の中央部は自然堆積層(テフラ)を叩き締めたものである。

壁残高は33~45cmを測り、壁下に周溝が巡らされる。また配置的に見て、柱穴と思われるものは楕円形を呈するP₁(36×30×35cm)のみである。他は、壁の一部を抉って構築される土坑状のP₁(56×54×42cm)、P₂(126×105×33cm)、焼土を多量に含むP₃(45×42×18cm)、P₄(42×42×12cm)、多量の焼土と共に土器片を多く含み、縁の床面が火焼状況を示すP₅(50×48×14cm)等のピット及び土坑状の落ち込みを検出した。特にP₁・P₂の2穴は、床面の堅固さに比べ検出当初より軟弱な締まりで、かつ貼床を施した形跡はなく、重複する他の遺構(土坑)と考えられる。

遺物(第25図)須恵器は高台付壺(2)、壺(1)、蓋(3)、土師器は甕(4)等で、全体的に出土量は少なく、P₅内に主に集中する。また貼床を剥した掘り方直上に、断面形が四角い何かの製品(槍かんな?)の、軸状の鉄器(5)が出土している。本址は、遺物の出土量は少ないものの、5号住居址に切られていることを考慮し、奈良時代の中頃から後半にその時期を推定する。



第24図 6号住居址実測図



第25図 6号住居址出土土器・鉄器実測図

第9表 6号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	調 整	備 考
1	环	(13.0) 5.6 4.2	体部中位まで、内湾して立ち上がり口縁部はやや外反する。	外面 ロクロナデ、底部回転糸切り 内面 ロクロナデ	焼成やや良好 乳白色粒子含む 色調7.5Y5/1(灰色)
2	高台付环	— (9.4) (2.1)		外面 ロクロナデ、底部高台貼り付け 内面 ロクロナデ	内面自然釉付着 色調5Y7/2(灰白色)
3	蓋	— (13.2) (2.1)	縁部にかえりを有せず、屈曲を呈する。	外面 ロクロナデ後、天井部回転 内面 ロクロナデ	焼成良好 つまみ部欠損 色調10Y5/1(灰色)
4	甕	— 10.0 (5.8)		外面 ナデ 底部木葉模 内面 ヘラナデ	多量に炭化物付着 色調10YR8/4(浅黄褐色)

第10表 6号住居址出土鉄器観察表

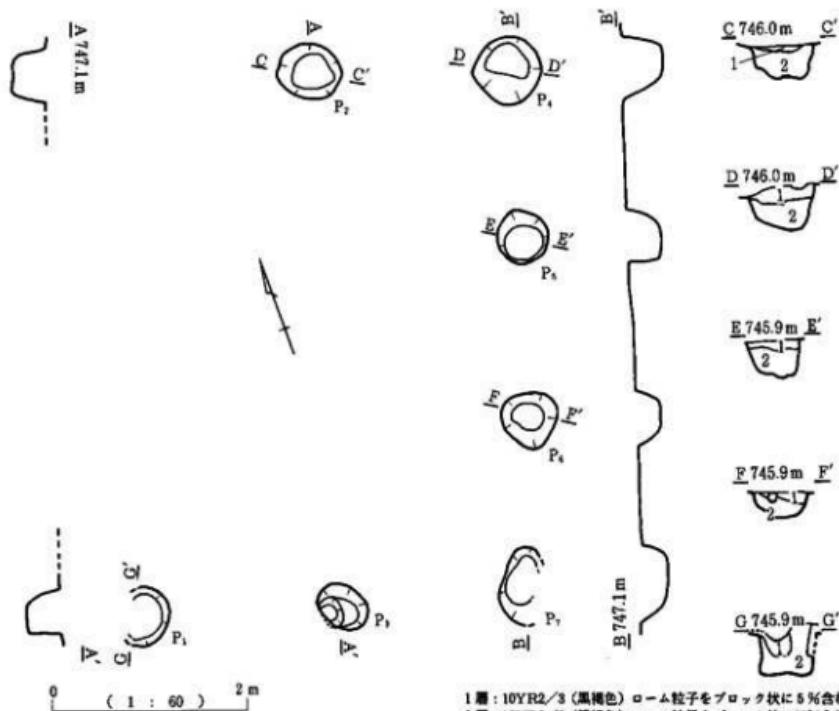
番号	器種名	法量(cm)	重さ(g)	特 徵 特 徵
5	鉄 棒	(10.0) 0.5 0.6		断面は、四角形を呈する。頂・基部は欠損し、どの器種の一部かは不明である。

2. 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址

遺構（第26図）H-3・4グリッドに位置し、長軸がN-17°-E方向を指す。西列の3穴は完全に、P₁のおよそ50%が調査区外に埋没し、P₂のおよそ50%は消滅していた。本址は、10本柱から構成される建物址のピット（柱穴跡）である。各ピットは、P₁（60×36×45cm）、P₂（66×57×33cm）、P₃（54×42×36cm）、P₄（72×72×48cm）、P₅（51×49×36cm）、P₆（54×53×30cm）、P₇（80×36×54cm）、他3穴である。推定される規模は、5.2×（4.2）m（3×2間）で、柱間は南北列で1.0m-1.2m-1.0m、東西列で1.4mを測る。各ピットの形状は円形を呈し、底面はほぼ平で堅く叩き締められている。また、本址の基礎となる四隅のピット（P₁・P₄・P₇）は、他と比較して気持ち大きく、かつ深いと観察した。

各ピット内の覆土は2分層された。

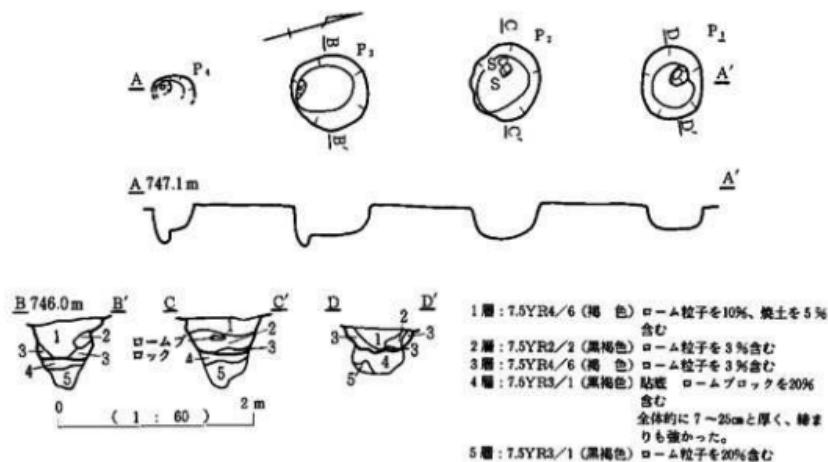


第26図 1号掘立柱建物址実測図

2号掘立柱建物址

遺構（第27図）H-4グリッドに位置し、1号掘立柱建物址東列の柱間部に、P₁（73×60×26cm）、P₂（81×69×40cm）、P₃（80×78×42cm）、P₄（47×24×30cm）の4穴が1.0m間隔で柱穴列が形成される。本穴列は、想定する建物址の西列のみの検出であり、他は西天竜建設時に消滅している。穴列の方向はN-14°-Eで、幸うじて確認したP₄は、およそ60%以上が消滅し、それ以南のつながりは不明である。覆土は5分層できた。各ピット共、掘り方に黒褐色土の貼底（4層）を行い、堅固な底面を作出していた。

また本址からは、出土遺物は検出されていない。

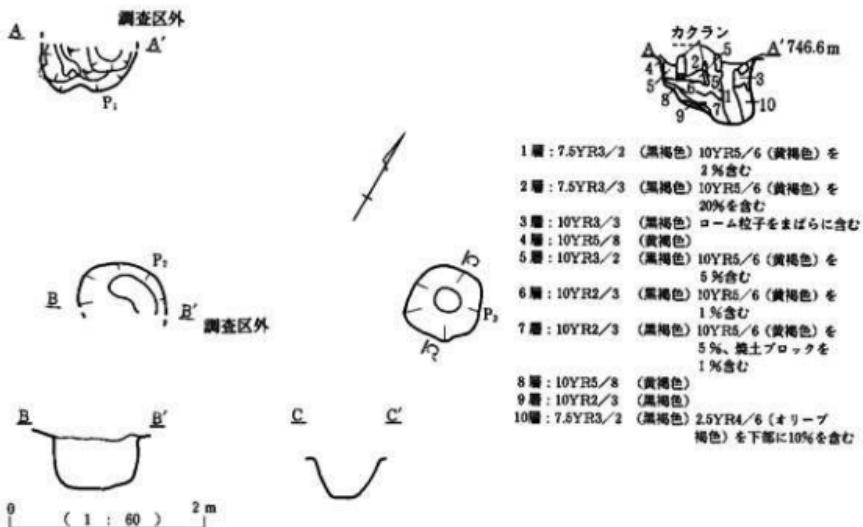


第27図 2号掘立柱建物址実測図

3号掘立柱建物址

遺構（第28図）本址はE-2グリッドに位置し、円形の4穴のピットから構成されるであろう、建物址の柱穴跡である。各ピットは、P₁（100×48×25cm）、P₂（93×48×56cm）、P₃（84×75×42cm）で、P₁-P₂ラインがN-58°-Eを指し、各柱間が2.4mを測る。P₁はおよそ50%が調査区外に掛かり、P₂は50%以上が消滅している。またP₃は、3号溝状遺構に切られていた。覆土の堆積状況が顕著に観察できたのは、P₁のみの10分層であり、その1層が柱痕跡と考えられる。

遺物（第29図）須恵器は壺（1）でP₁から、土師器は甌（2）でP₂から出土している。1は、奈良時代末から平安時代初期の所産と観察する。



第28図 3号掘立柱建物址実測図



第29図 3号掘立柱建物址出土土器実測図

第11表 3号掘立柱建物址出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	調 整	備 考
1	杯	(13.2) (7.2) 2.8	体部は内湾気味に大きく開く。	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	焼成良好 胎土は砂粒含む。 色調5Y5/1 (灰色)
2	甌	- (8.4) (4.8)	底部平底。	外面 ナデ、底部木葉痕 内面 ナデ (底辺部指痕を残す)	外面炭化物付着。 色調10YR6/4 (にぶい黄橙色)

3. 溝状遺構

1号溝状遺構

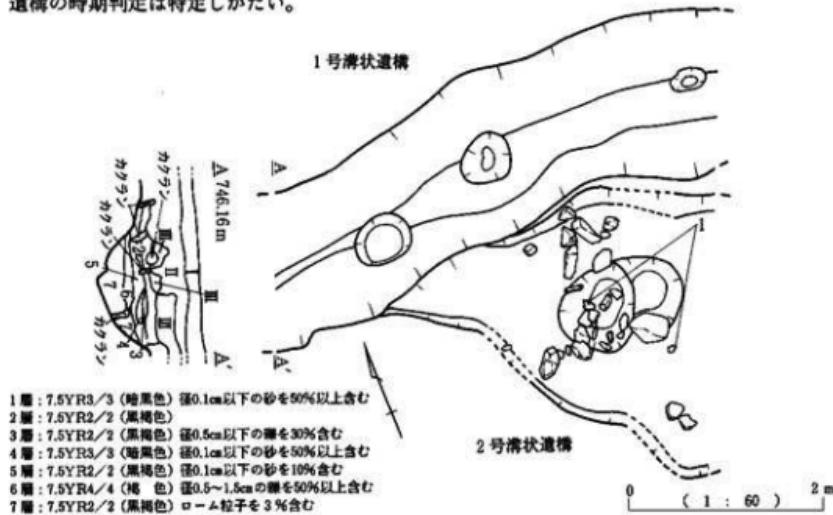
遺構（第30図）L-3・4グリッドに位置する。地形的に見て東方に自然傾斜することを考慮し、N-88°-E方向に流路を想定する。溝の断面形は緩やかな「V」字状を呈し、確認面から60~70cmの深さを測る。また、溝底に3基のピットを確認したが、本遺構との重複状況と時期差は確認できなかった。

尚、本遺構から時期判定し得る遺物の出土はなかった。

2号溝状遺構

遺構（第30図）L-3・4グリッドに位置する。自然傾斜の状況から、検出した現況ではN-122°-E方向に流路を想定する。本来は1号溝状遺構が本流であって、短期間の流入による砂礫土の堆積で溝底が上昇し、本流から決壊して流路を変えた状況が本遺構の性格と考える。また、人頭大もの転石を多数運搬し、かつ決壊箇所が約0.9m幅に対しわずか3mの距離で3倍以上の大2.8m幅に広がる状況は、かなりの勢いで氾濫したものと連想する。深さは18~20cmと浅く、溝底は平坦である。

遺物（第31図）須恵器は壺の破片、蓋（1・2）、土師器は甕の破片が主に溝底から出土している。出土土器の観察から、奈良時代末から平安時代初期の所産物が多いが、流入物のため本遺構の時期判定は特定しがたい。



第30図 1・2号溝状遺構実測図



第31図 2号溝状遺構出土土器実測図

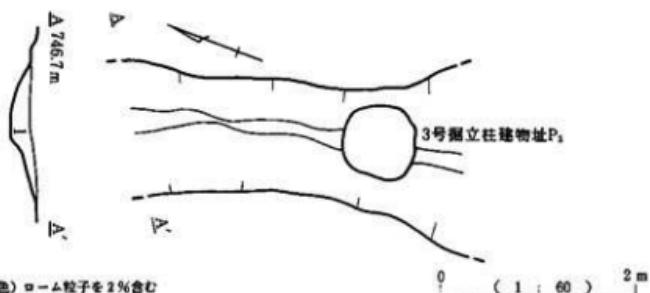
第12表 2号溝状遺構出土土器観察表

番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1	蓋	(cm) 14.3 2.3	つまみ部は、端部と中央部がやや突出した盤状を呈する。	外面 ロクロナデ後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	粘土は砂粒を含む 外面 酸化により橙色を示す。 (7.5YR6/6) 色調 2.5Y6/2 (灰黄色)
2	蓋	— 17.2 2.7		外面 ロクロナデ後、天井部回転ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	つまみ部欠損 焼成良好 色調 2.5Y6/2 (灰黄色)

3号溝状遺構

遺構（第32図）E-2グリッドに位置する。自然傾斜の状況から、検出した現況ではN-16°-E方向に流路を想定する。溝の断面形は緩やかな「V」字状を呈し、確認面から25~30cmの深さを測る。また溝底に、3号掘立柱建物址のピット（P₃）を確認したが、本遺構との重複状況と時期差は確認できなかった。覆土は、極暗褐色の单一土層で、砂礫等の一時的な堆積ではなく、他の遺構と同様に自然堆積と観察した。

尚、本遺構から時期判定し得る遺物の出土はなかった。



1層 : 7.5YR2/3 (極暗褐色) ローム粒子を2%含む

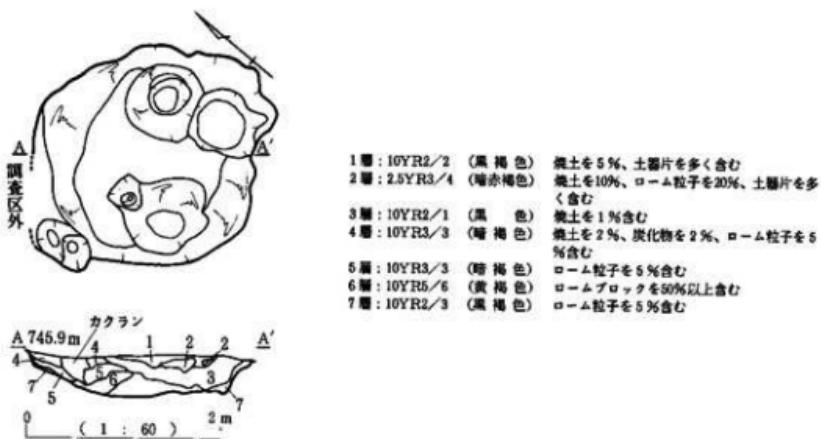
第32図 3号溝状遺構実測図

4. 壊穴状遺構

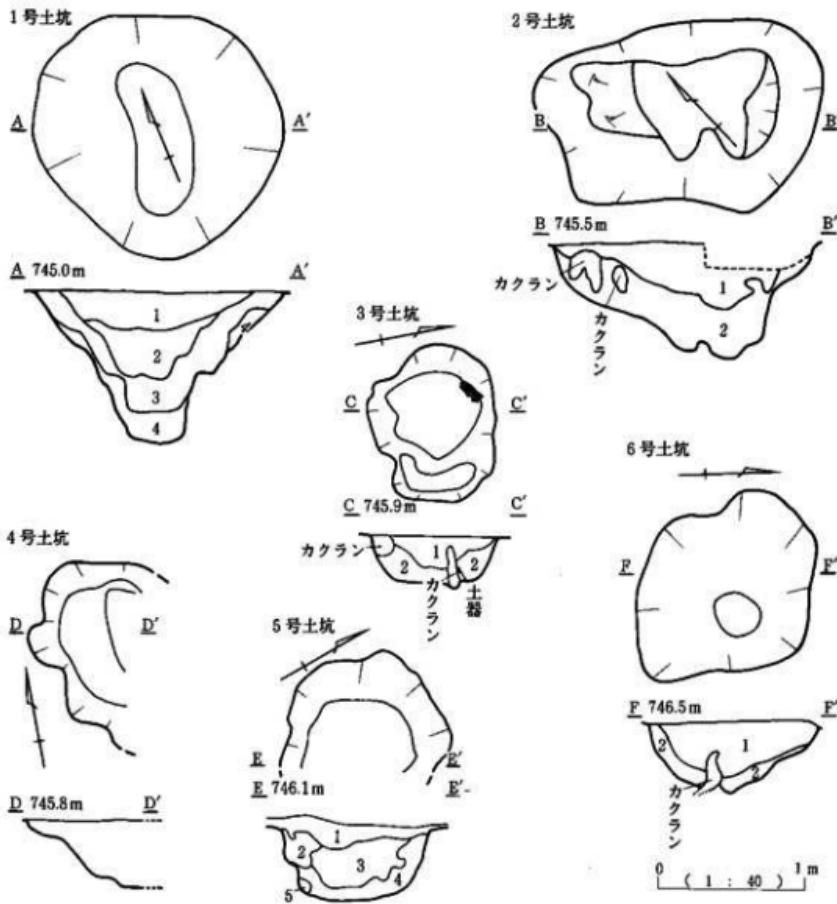
1号壊穴状遺構

遺構（第33図）I-3・4、J-3・4グリッドに位置する。2.9×2.3mの、不整齊円形のプラン形状を呈する。深さは56cmを測り、プラン形状と同様に、不整形ながら皿状に掘り込まれ、急激な立ち上がりは認められなかった。また11号ピットと重複するが、11号ピットのみ本址を切っている状況がつかめたが、他は不明確であった。

覆土は7分層できたが、他の遺構と比較し不規則な堆積状況を示していた。覆土は、1～4層と5～7層の2グループに大別でき、堆積過程のなかで自然堆積と言うよりむしろ、人為的作用が働き埋没した可能性を指摘できよう。その理由として、まず観察した堆積状況で前者のグループは焼土・炭化物・土器等の遺物を含み、後者のグループはそれがまったく見られないこと、次に各グループ内ではある程度の堆積順序に規則性があり、両者の境界がはっきりと分けられること、境界部に火焼状況を示す痕跡がなく、不自然にも焼土・炭化物が検出し、かつ土器も器形の整った物はおろか種類が多いがすべて破片のみであったことが、あげられる。これらの状況から、本来の目的に使用された後、または目的のために構築されたかは不明であるが、土器・焼土・灰等の廃棄場的役割を果たす遺構と推察する。



第33図 1号壊穴状遺構実測図



第34図 土坑実測図



第35図 3号土坑出土土器実測図

第13表 土坑一覧表 (規模欄:上段=長径、中段=短径、下段=深さ)

番号	器種	断面形	規模	覆土	積り基性	備考
1	円形	三角形	(cm) 170 160 120	1層 7.5YR2/2 (黒褐色) 径1~2cmの礫を5%含む 2層 7.5YR3/1 (黒褐色) 3層 7.5YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む 4層 7.5YR4/6 (褐色) ローム粒子を50%含む	中 中 強 弱	中
				1層 7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を3%含む 2層 7.5YR3/1 (黒褐色) ローム粒子を10%含む	中 中	中
				1層 10YR3/3 (暗褐色) 径4cmのロームブロックを10%含む 2層 10YR4/3 (にぶい黄褐色) 径7cmのロームブロックを20%含む	強	中
				1層 7.5YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を3%含む	弱	中
5	円形	台形	105 88 31 — 106 52	1層 10YR2/3 (黒褐色) 炭化物を1%含む 2層 10YR3/3 (暗褐色) 3層 7.5YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を1%含む 4層 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を1%含む 5層 10YR4/6 (褐色) 6層 10YR5/8 (黄褐色)	中 中 中 中 強 中 強 中	中
				1層 10YR2/3 (黒褐色) 2.5Y6/6 (明黄褐色) をブロック状に5%含む 2層 10YR5/6 (黄褐色) 7.5YR2/3 (極暗褐色) を10%含む	中 中	中

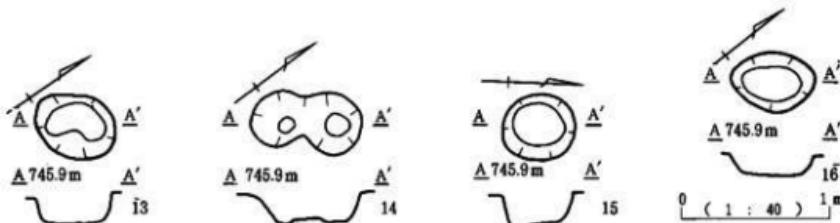
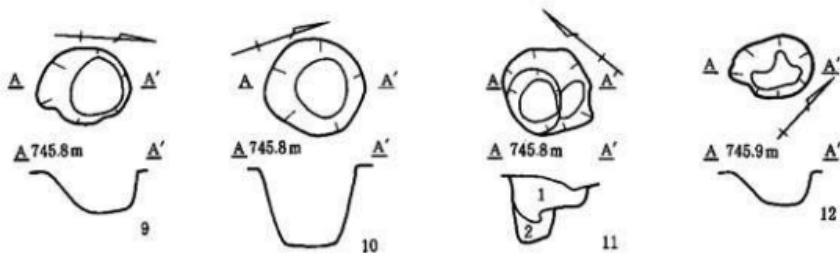
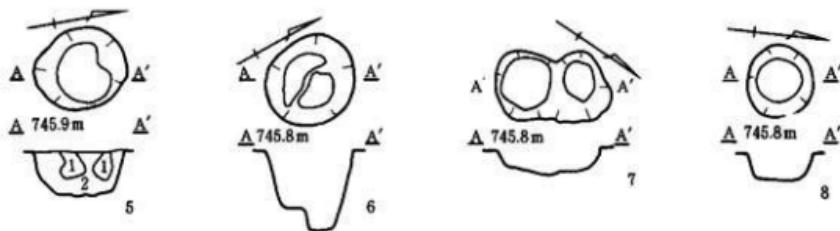
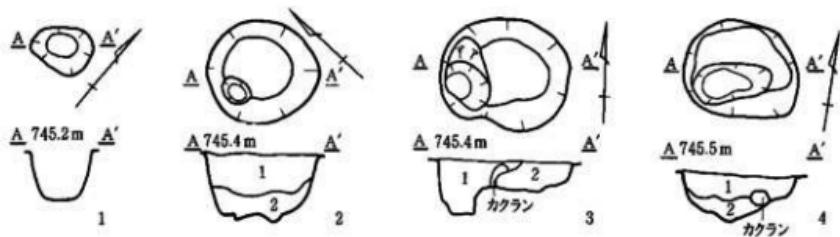
5. 土 坑

遺構（第34図）主に、プラン形状が比較的大型で複数に覆土が分層できたもの、他の遺構とは異なる時代の遺物を出土するものを土坑とし、ピットと大別した。1号土坑のように、平面形が楕円形でかつ底面が平らで、すり鉢状に他よりも深く掘り込まれた、「落とし穴」土坑の諸特徴を有するものや、縄文土器が埋没する3号土坑のように、ある程度その性格や時期が特定できる土坑は少ないと言える。

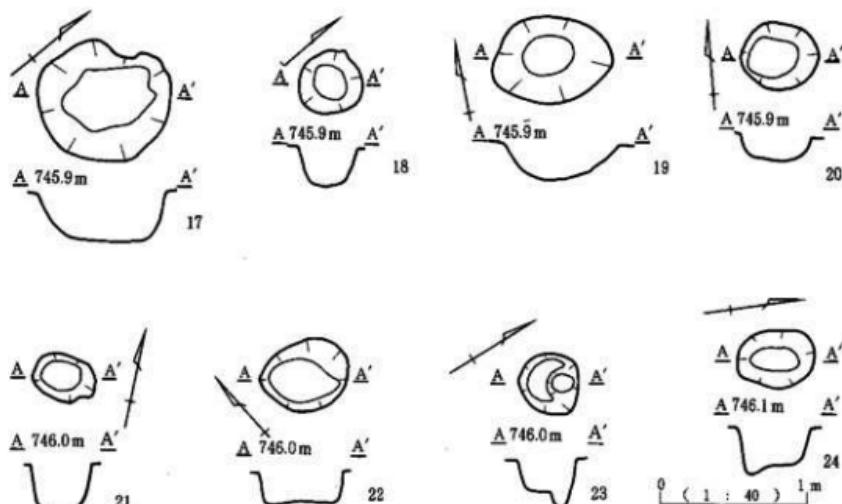
遺物（第35図）3号土坑より縄文土器が出土している。口縁部は、半截竹管状工具による爪型文・横線文・格子目文を組み合わせ、その下部をR L縄文を縦位羽状に充填する。しかし、単なる縄文を施すと言うより、撚糸文を感じさせる。

6. ピット

遺構（第36・37図）土坑以外の小穴で、時期及び性格の不明確なものをピットとして類別した。掘立柱建物址の一穴に属するものも含まれると思われるが、今回の調査結果からは詳細にその状況が捕らえられなかった。



第36図 ピット実測図 1



第37図 ピット実測図2

第14表 ピット一覧表

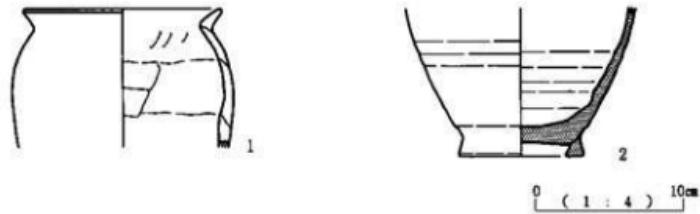
番号	器種	断面形	規 模	覆 土	盛り粘性	備 考
			(cm)			
1	楕円形	長方形	43			
			32			
			32			
2	円形	台形	77	1層 7.5YR3/3 (暗褐色)	弱	中
			69	2層 7.5YR4/6 (褐色)	弱	強
			52			
3	楕円形	二段構造	88	1層 7.5YR2/3 (極暗褐色) ローム粒子を10%含む	弱	中
			75	2層 7.5YR3/2 (黒褐色) ローム粒子を5%含む	中	中
			35			
4	楕円形	半円形	78	1層 7.5YR3/4 (暗褐色) ローム粒子を3%含む	中	強
			64	2層 7.5YR4/6 (褐色) ローム粒子を50%以上含む	中	中
			31			
5	円形	台形	64	1層 10YR2/3 (黒褐色)	中	中
			55	2層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を30%含む	弱	弱
			30			
6	円形	二段構造	60			
			60			
			75			
7	不整椭円形	台形	78	1層 10YR1.7/2 (黒色) 10YR5/8を40%含む	中	中
			40			
			15			
8	円形	台形	50	1層 10YR1.7/2 (黒色) 10YR5/8を40%含む	中	中
			44			
			18			
9	不整椭円形	台形	64	1層 10YR2/1 (黒色)	強	中
			50			
			28			

番号	器種	断面形	規模 (cm)	覆土	弱り 弱	粘性 中	備考
10	円形	長方形	68 66 43	1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む	弱	中	
11	円形	二段構造	58 58 45	1層 10YR2/1 (黒色) ローム粒子を10%含む 2層 10YR3/4 (暗褐色) ローム粒子を5%以上含む	弱	弱	
12	椭円形	台形	46 40 23	1層 10YR4/4 (褐色) ローム粒子を50%以上含む	弱	中	
13	椭円形	台形	45 42 19	1層 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を10%含む	強	中	
14	不整椭円形	台形	64 26 22	1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子をブロック状に5%、焼土を33%含む	強	中	
15	円形	台形	48 44 23				
16	椭円形	台形	56 42 15	1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子をブロック状に5%、焼土を33%含む	弱	中	
17	椭円形	台形	90 82 34	1層 10YR3/4 (暗褐色) ローム粒子を20%含む	中	中	
18	円形	長方形	42 42 28	1層 10YR3/3 (暗褐色) ローム粒子を10%含む	弱	弱	
19	椭円形	半円形	80 58 35				
20	円形	台形	52 43 18				
21	椭円形	長方形	43 30 30	1層 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を5%含む	中	中	
22	椭円形	台形	60 48 22	1層 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を5%含む	中	中	
23	円形	二段構造	40 40 34	1層 10YR2/2 (黒褐色) ローム粒子を5%含む	中	中	
24	椭円形	台形	52 38 32	1層 10YR2/3 (黒褐色) ローム粒子を5%含む	弱	中	

7. 遺構外出土遺物（第38・39図）

トレンチ掘削時、及び遺構上面確認調査時に出土した遺物を総括する。土器は、半截竹管状工具で施した沈線文・結節繩文などの、縄文中期初頭期の土器片や、土師器の甕（第38図1）須恵器の長頸壺（同2）が出土している。

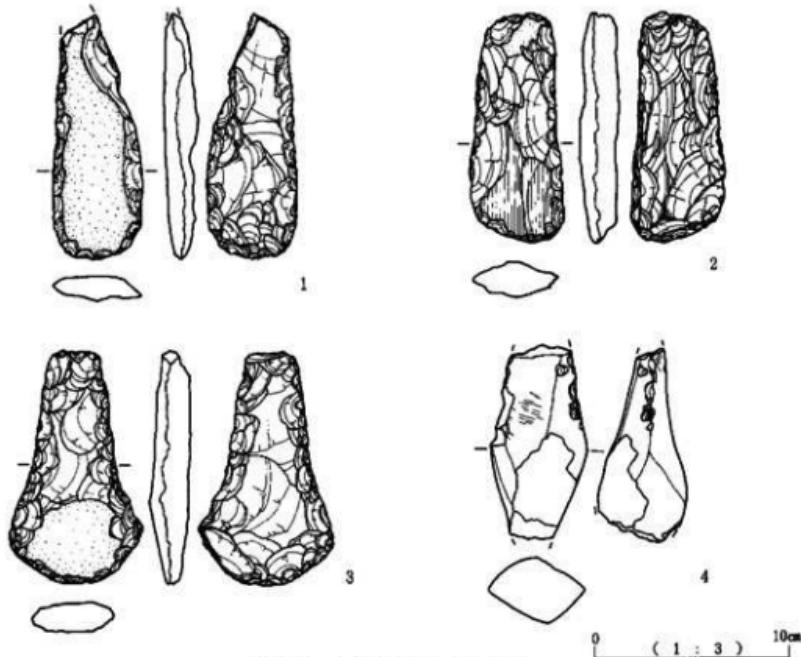
石器は、打製石斧（第39図1～3）、砥石（同4）の他、黒曜石の薄片やチップも出土している。



第38図 遺構外出土土器実測図

第15表 遺構外出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	調 整	備 考
1	壺	(13.4) (14.2) (9.3)	口縁部「く」の字状に短く外反し、胴部はゆるく膨らむ。	外面 ナデ 内面 横方向のヘラナデ	内面炭化物付着。 外面風化している。 色調 7.5YR6/4 (ぶい橙色)
2	長 頸 壺	- 8.2 (9.9)	底部器厚が厚い。	外面 ロクロナデ、底部静止糸 切り後、高台貼り付け。 底辺部ヘラケズリ。 内面 ロクロナデ	焼成良好で硬質。 色調 10GY5/1 (緑灰色) 2.5Y7/4 (浅黄色)



第39図 遺構外出土石器実測図

第16表 遺構出土石器観察表

(法量欄: 上段=長さ、中段=最大幅、下段=厚さ)

番号	分類	石質	法量	重さ	諸特徴	備考
1	打製石斧	砂岩	(cm) (12.5) 4.6 1.7	(g) 100	円刃、短冊形 表面に自然面を有し、側縁部は細い打撃などにより、丁寧に調整されている。 使用による、刃部の後退が認められる。	上部先端欠損
2	打製石斧	緑泥岩	11.7 4.7 1.9	135	偏刃、短冊形 表面上部に自然面を残し、刃部に磨耗痕が認められる。頂部も刃部として使用可能と思われる。	
3	打製石斧	砂岩	11.8 6.7 2.0	150	円刃、撥形 自然面を刃部に利用している。両側面に細い打撃調整を加えることにより、たいへんきれいに作出されている。	
4	砥石	泥岩	(9.8) 4.9 4.5	145	ちょうど片手で握れる程の小型のもので、使用が激しいためか、やや内湾している部分がある。全体が砥石として使用されたと思われ、欠損部を除き、8面に使用痕が認められる。磨痕がわずかに残る。	上・下部先端欠損

第V章　まとめ

昭和48年度に県教育委員会が実施した中央自動車道建設に先立つ堂地・中道両遺跡の発掘調査は、その規模や結果の内容から、当時としては非常に驚くべき出来事であった。更にこの調査を契機に、発掘調査に多くの人々が関心を持ち始め、現在に至る埋蔵文化財保護のさきがけとなったと言えるであろう。またこの調査により、伊那谷北部を代表する繩文、奈良、平安時代の集落遺跡の一つに数えられる様になった。特に、奈良時代から平安時代に掛けての集落域の広さと出土遺物の豊富さを概観するだけでも、他の同時期の遺跡とはスケールの大きさの違いを感じさせる。また、その後町教育委員会が実施した一般県道「沢尻箕輪線」建設工事に伴う両遺跡の発掘調査では、中道遺跡の集落形成が古墳時代後期にまで遡ることが判明している。

今回は、面積的にはかなり大規模なものであったが、多くの研究者によって両遺跡の土器研究が整備されていることで、おおよその時期区分が可能であったにもかかわらず、5m平均幅の非常に厳しい条件化での調査であり、完掘できる各遺構の割合も低く、多くの難題を残す結果となった。しかし、中道遺跡の調査では、南北におよそ1kmにも及んだこともある、遺跡包蔵地範囲の北域を確認する上で、一つの基準となるデータが得られた。それが、唯一今回の大きな成果であったと言える。

両遺跡は、東山道信濃ルートに大きな係わりがあるとする論説も多いが、未だ決定的な証拠は得られないまま今日に至っている。これまでの調査段階の中で、6世紀以降の集落形成において、本地域一帯が一地方の集落としては、特異な一例に掲げられるだろう。それが、当時の時代背景との何らかの因果関係を持つのかは、更に研究を重ねて行かなければならない大きな課題である。

なお、本書の末筆にあたり、本事業に多大なご理解とご協力をいただいた上伊那地方事務所、並びに上伊那西天竜土地改良区等の関係諸機関を始め、松島、大出、八乙女の各地域の皆様、そして直接調査にご尽力いただいた調査団の皆様に、改めてお礼を申し上げたい。

参考・引用文献 (著者名50音順)

- | | | |
|-------------|------|--|
| 伊那市教育委員会 | 1983 | 『鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡』 |
| 笠沢 浩 | 1975 | 「長野県下出土の須恵器」信濃26-9・11 |
| 笠沢 浩 | 1986 | 「凸帯付四耳壺考」長野県考古学会誌51 |
| | | |
| 長野県教育委員会 | 1974 | 48『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』箕輪町 |
| 長野県教育委員会 | 1973 | 48『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』辰野町
その2 |
| 長野県教育委員会 | 1990 | 『中央自動車道長野線埋蔵発掘調査報告書4』総論編 |
| 長野県考古学会 | 1987 | 「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」長野
県考古学会誌55.56 |
| | | |
| 長野県史刊行会 | 1981 | 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表 |
| 長野県史刊行会 | 1985 | 長野県史 考古資料編 全1巻(2) 中・南信版 |
| 長野県史刊行会 | 1988 | 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 遺構・遺物 |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会 | 1976 | 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編 |
| 箕輪町誌編纂刊行委員会 | 1986 | 箕輪町誌 第2巻 歴史編 |
| 箕輪町教育委員会 | 1980 | 「箕輪遺跡 第1集」 |
| 箕輪町教育委員会 | 1981 | 「箕輪遺跡 第2集」 |
| 箕輪町教育委員会 | 1982 | 「箕輪遺跡 第3集」 |
| 箕輪町教育委員会 | 1974 | 『八乙女五輪遺跡』 |
| 箕輪町教育委員会 | 1989 | 『堂地・中道遺跡』 |
| 箕輪町教育委員会 | 1990 | 『丸山遺跡』 |

報告書抄録

ふりがな	どうち・なかみちいせき							
書名	堂地・中道遺跡							
副書名	県営畠地帯土地総合改良事業伊那西部地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著者名	赤松 茂・根橋とし子・宮脇陽子							
編集機関	箕輪町教育委員会							
所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,298番地 TEL0265-79-3111							
発行年月日	1995年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
所	在	市町村	遺跡番号	°	°			
堂地	長野県上伊那郡 箕輪町大字 中箕輪 11,194番地1他	49	8689	35度 55分 10秒	137度 58分 27秒	19930301～ 19930305 19930405～ 19930618	2,350m ²	県営畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区(排水路・付帯道路建設)
中道	長野県上伊那郡 箕輪町大字 中箕輪 3,298番地2他	14	8691	35度 55分 20秒	137度 58分 24秒	19931020～ 19931224 19940411～ 19940502 19941102～ 19941101	5,000m ²	県営畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区(排水路・付帯道路建設)
所有遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
堂地	集落址	奈良～平安	竪穴式住居址 溝状造構 ピット	1棟 1条 1基	土師器 須恵器	昭和46年に県教育委員会(中央道建設)、同62・64年に町教育委員会(県道沢尻箕輪線建設)が発掘調査を実施しており、縄文時代中期初頭の集落及び土坑群、古墳時代末から平安時代中期の集落址が出土している。特に中道遺跡からは、奈良時代の大型住居址より奈良三彩の小壺の蓋が出土している。		
中道	集落址	縄文中・初奈良～平安	竪穴式住居址 堀立柱建物址 溝状造構 土坑 ピット 竪穴状造構	6棟 3棟 3条 6基 24基 1基	縄文土器 土師器 須恵器 打製石斧 黒縞石 鐵鎌 刀子 鐵棒 砥石			

四 / 版

堂地遺跡



調査区全景
(南方より)



土層堆積状況



1号住居址
(南方より)



中道遺跡

第2・3試掘調査区遠景
(北方より)



第1試掘調査区
トレンチ掘削状況
(南方より)



第1トレンチ
(南方より)



第1トレンチ
土層堆積状況



第8トレンチ
(南方より)



第8トレンチ
土層堆積状況



第2試掘調査区
トレンチ掘削状況（南方より）



第13トレンチ
(南方より)



第13トレンチ
土層堆積状況



第3試掘調査区
トレンチ掘削状況（南東より）



第19トレンチ
(南東より)



第19トレンチ
土層堆積状況



本調査区全景1（南方より）



本調査区全景2（北方より）



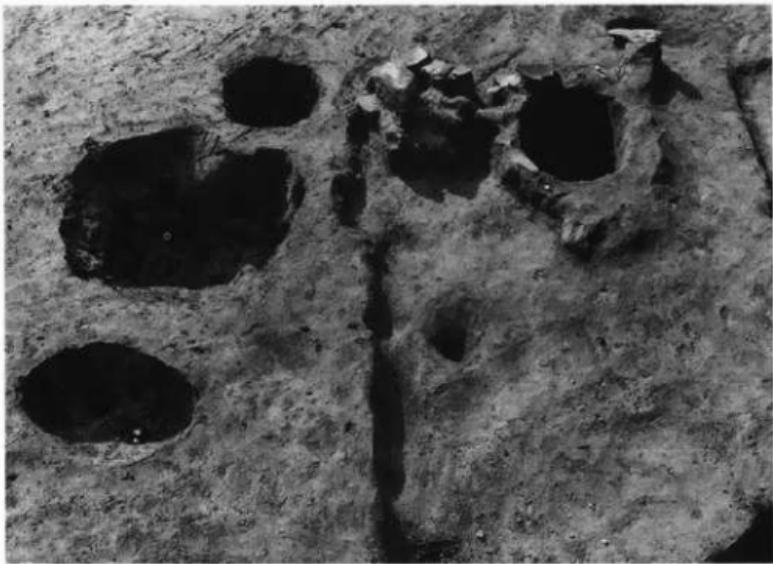
1号住居址



2号住居址



3号住居址



4号住居址



5号住居址



6号住居址



1号掘立柱建物址



2号掘立柱建物址



3号掘立柱建物址



1・2号溝状遺構



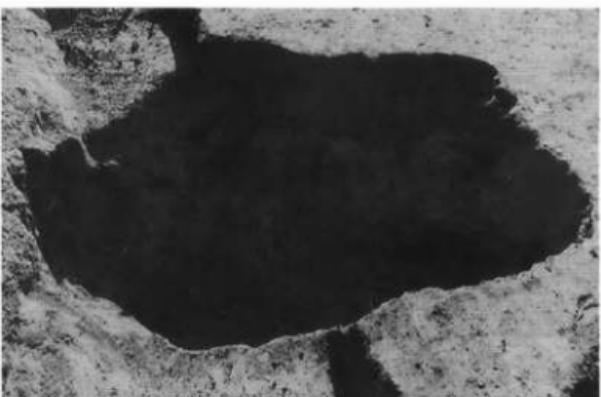
3号溝状遺構



1号竪穴状遺構



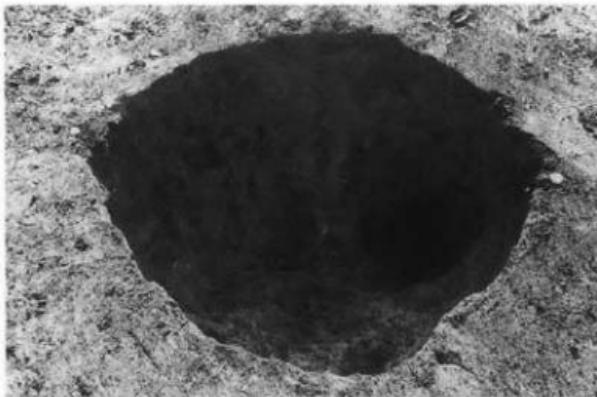
1号土坑



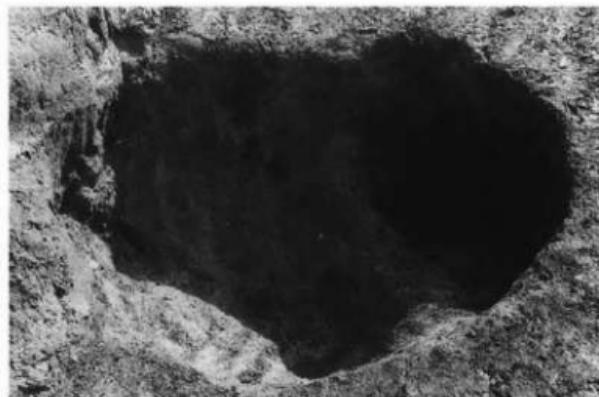
2号土坑



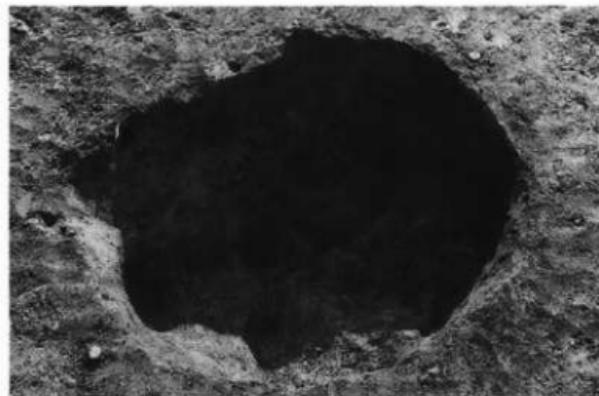
3号土坑



2号ピット



3号ピット



4号ピット



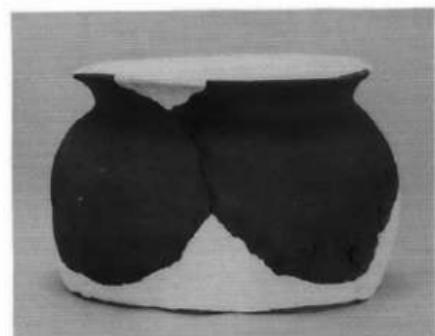
7-4



7-1



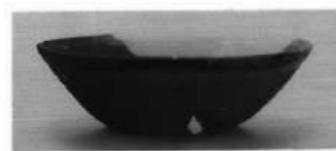
16-1



13-1



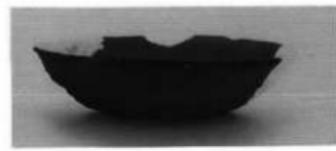
16-2



16-5



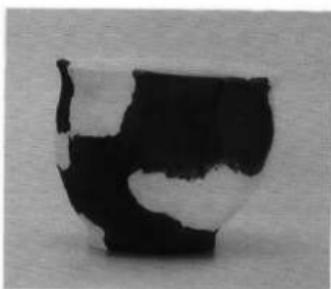
13-2



16-6



16-2



19-2



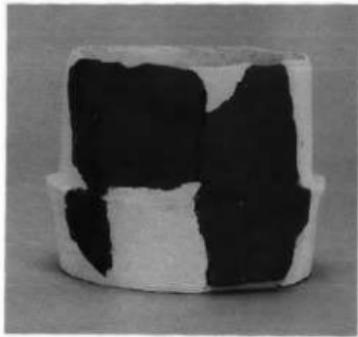
19-2



23-1



23-4



23-6



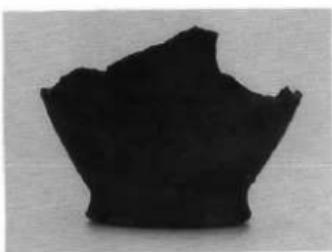
23-8



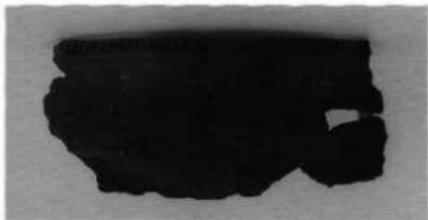
23-7



25-1



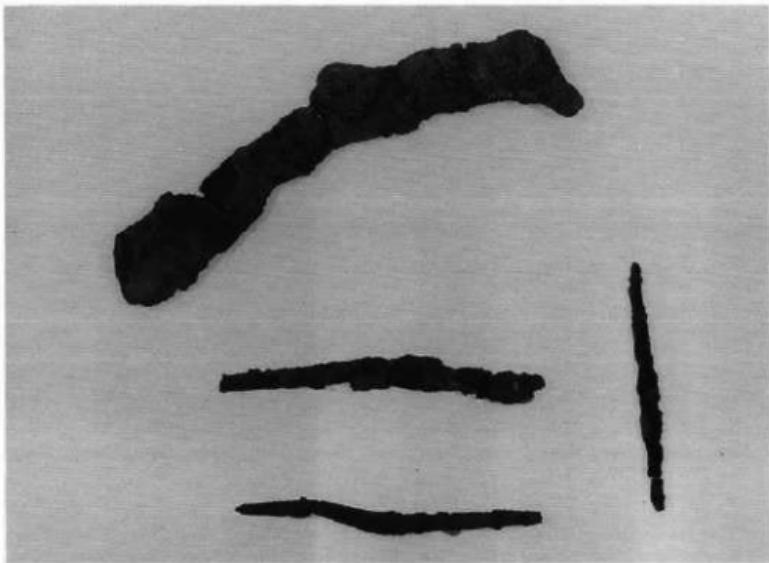
38-2



35-1



39-1·2·3·4



出土鉄器



調査参加者

堂地中道遺跡

平成4～6年度県営畠地帯総合土地改良事業
伊那西部地区埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年3月10日 印刷

平成7年3月10日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 駒ヶ根市 (株)宮沢印刷

